302.25
KA52

2

0000431000

0000431-000

３０２．２５－Ｋａ５２ウ

大東亜戦下の印度

金平太郎・著

東邦書院

昭和１７

AAB

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

大東亞戰爭の性格

302.25
KA52

企畫院
太田宰著

302.25
KA52

大東亞戰爭の印度

金平太郎著

東邦書院

945
224

目次

第二次世界大戰とインド……（一）
戰爭によるインドの轉向
イギリスの戰爭にインド工業は利用されるか
イギリスの犧牲となつた資源
、イギリスに對する誤れるインドの傳統
インドを縛る關稅の網
銀行もインド人を差別する
イギリスへの挑戰の第一歩
しかもイギリスは欺く
インド解放の鍵はいづれにあるか

東京書房

インドはイギリスの戰爭を果してまかなへるか……（二九）
戰爭とインドの經濟情勢
戰爭の進展と外國貿易の變化
インドを欺瞞者としてのイギリスの自殺……（四三）
イギリスの殖民地獲得法
殖民地の重荷に惱む今日
インドを非人間的に扱ふ紳士
イギリスの自殺
インドは如何に戰ふか……（五七）
反英運動の展開
インド民衆を欺瞞した「白書」
インド民衆の尖鋭化と墮落する指導者
戰爭の進展とインド內部の動搖

インド國境地方もイギリスの空爆下に戰ふ……（七一）
イギリスの空爆に世界は抗議す
イギリス政府の無能
インド國境民族とドイツ
反英運動の指導者としてのネールとガンヂー……（七九）
ネールの成長
イギリスの橫暴と戰ふネール
ガンヂーの影響によるネール
インドの實
兩極端に立つ二人
イギリスはインドに敗れた……（九一）

インドは千載一遇の好機を掴め……（九九）
樞軸國と英米の軍事能力の現段階
日本の戰勝とインド
大東亞戰爭下のインドの眞相……（一〇七）
大東亞戰爭とインド自覺
前大戰と今大戰の軍備の差異
民族運動の變化
大戰下の反英運動の不統一
反英運動と農村の階級分析
大戰による農民の窮乏と反英運動
大東亞戰爭とインド工業
インドの大戰に對する軍備
クリップスの敗退

第二次世界大戰とインド

アンドル・ロス

戰爭によるインドの轉向

地球を蔽ふ戰火の嵐が、陸に海に進展するにつれて、その經濟生活が極度に集中化され、しかも長い運輸路に運命を托してゐる一つの國家の脆弱性は、しだいに際立ち始めてきた。エジプト、シリア、イラクを通過してのスエズ運河にたいするヒットラーの鋏狀(ピンサー)進擊、インド支那における日本の進出、さらに海運危機の尖鋭化等――これら最近の諸事件は、イギリス帝國のその弱點に世界は注視の焦點を向けさせた。この危機に對處するために、一九四〇年十月二十五日チューリッヒで、イギリス帝國領諸國家の代表者によつて、東方グループ會議を開催した。

イギリス帝國に屬するインドおよび、その他の國は、過去二年の間その生産力の擴大について、一歩を踏み出しはしたもの丶、その動きを統制し、これを指導してゆくことについては、積極的な努力が拂はれたとは思はれない。そこで東方グループ會議の目的は、東方地域の防禦

のため一つの確實な經濟的地盤を建設すること――チャーチル首相の言葉をもつてすれば、「われわれ共通の目的たる自由を擁護し、古き世界のバランスを匡すべき新しき武力の世界を建設する」ことにあつた。この會議の結果として、東方軍需品評議會が設立され、その中樞機關がインドにおかれた。けだしこの地の莫大なる經濟的資源はインドをしてこの計畫の論理的中樞たらしめたからである。その上、インドの工業生產力が、この地域內の他の國（オーストラリアを含む）の生產力をはるかに凌駕するといふことは、インドをしてますます東方兵站基地の最も重要なる一員たらしめてゐる。

インドが重要なる兵站基地になつたといふこの轉換は、近東および東南アジアにおける現下の緊迫した戰爭によつて生れたものではあるが、それはやがて本來の性質を乘りこえて、事實上、インドとイギリス帝國との關係が、この轉換の結果如何にかゝるといふ重大な問題を見逃す譯にはゆかないであらう。

イギリスの戰爭にインド工業は利用されるか

過去二ケ年間に生產量において金屬工業が他の種の工業よりも最大の進步を示したのであつた。銑鐵の生產高は一九三八年――三九年の一、六〇〇、〇〇〇トンから、一九三九――四〇年の二、〇〇〇、〇〇〇トンに增加し、鋼塊は九〇〇、〇〇〇トン强から約一、二〇〇、〇〇〇トンに增加し、鋼鐵の生產高は八六七、〇〇〇トンから九六二、〇〇〇トンとその生產高を增加し、本年度の生產計畫は一、二五〇、〇〇〇トンと決定してゐる。合金裝甲板がターター鐵鋼會社のジャムシェッドプル工場において造られてゐるが、これはインド史上嚆矢とするところである。同會社は現在一つの製鋼工場を增設中であり、これによつて年二〇〇、〇〇〇トンの增產が豫定され、その內約七〇、〇〇〇トンは酸性鋼として裝甲板に使用されるはずである。

インドにおける軍需工場の數は、一九四〇年五月までに、前大戰において最後の年までに建てられた數を、はるかに凌駕してゐる。その上インド政府は昨年六月、軍需品工場並に鐵道工

場をふくむインド兵器工場の擴張のために、百萬ドルの補助金を下附することを發表し、本年初めには兵器工場、火砲工場、彈藥工場、小銃工場等の擴張ならびに近代化のために、千二百萬ドルの追加補助金を豫定した。この擴張によつて、これまで國內武器必要量（六インチ砲を含む）の九〇％を供給することができたインドは、今や二十五ポンド砲、飛行機用爆彈、輕機關銃、三・七インチ高射砲の砲身等をふくむ最も近代化された武器をも製作することができるまでになつたのである。又、タ―タ―工場において製造され東インド鐵道工場において仕上げられる裝甲板によつてエンヂンを除いたインド製タンクの製作も可能となり、月産三、〇〇〇の裝甲自動車も造れるまでにインドは近代的進歩をとげた。

今次大戰の勃發するまでは、インドはその機械の全部を輸入に仰いだものであるが、現在では、タンク、エンヂンにたいする切なる要求と飛行機製作の計畫とは、機械の輸入がきはめて困難になつたといふ現實とあひまつて、インドにおける生產機製作工業の建設に大きな刺戟となつた。輸入の困難さは、一九四〇年の最初の八ヶ月の機械輸入高が、その價格は問はないまでの激しい要求があつたにもかゝはらず、一九三九年の當該期間に比べて二八％の減少を示してゐるといふ事實からも知られる。資材入手困難のため創業延期のやむなきに至つた軍需工場も若干あつたときく。この不足を克服せんとして最初の努力が、簡單な旋盤およびミーリング盤の生產にたいして拂はれつゝある。政府保證の工作機械製造工場が資本金三十萬ドルをもつてマイソールに建設された。

その大部分を政府の所有するところであるインドの鐵道は、工業自給の方向に顯著な變換をみせてゐる。これまで鐵道部分品の輸入高は年平均三百萬ドルにおよんだ。本年初頭インド政府鐵道局はタ―タ―會社に、これまでアメリカより輸入してゐた鐵道部分品は一九四一年の終りまでにタ―タ―工業によつて製作されるやう生產命令を出したと傳へられる。また東インド鐵道のカンチラパラ工場において機關車製作の計畫が、機械輸入困難な現下においても順調に進行中である。その他、驅逐艦およびスループ艦をも製作中であり、百二十萬ドルの註文を受けてゐる。

かゝる工業の近代化の進展、また化學製品の輸入杜絕によつて、インド化學加工業は著しい刺戟をうけた。二つの重要な會社――インド・アルカリ化學コーポレーションおよび有限タ―

ター化學工業會社は、幾つかの工場を建設中である。一九四〇年の終りには國内原料から硫酸を製造する工場が建設され、一九四一年の初頭には約十二種の重要化學製品が製造されるまでになつてゐる。今では輸入されたアルミニユームもインドにおいて製品化されるまでになり、一九四二年にはインド國産のアルミニユームが局地的に抽出され壓延され製品化されるものと豫定されてゐる。同様の進歩はアンチモニー工業にも見られる。

また、インドの副次的工業も、基本的工業にならんで、イギリスの戰爭遂行能力に重要な役割を果して來た。事實上インドの獨占産業であり、綿業をのぞく一切の工業よりも多くの勞働者を雇傭する黄麻(ジユート)工業は、イギリスの註文によつて十億の砂袋を生産してきた。また手工業の大部分もふくめての羊毛工業の生産品は、軍服やシャツのごとき軍需品として全部買ひとられた。軍靴は月産十二萬五千足の割合で作られつゝある。

このことは要するに、インドはスエズ以東におけるイギリスの重要なる兵站基地といふ役割を與へられ、その結果インド工業はイギリスの要求に應じて、再び加速度的に發展しつゝあるのである。

イギリスの犠牲となつた資源

これまでもしばしばインド工業がどの程度の潜在發展力を持つてゐるかといふ問題についていろ〳〵な角度から論じられてきたが、それが現在ほど切實な問題として取上られたことはない。結論としては、利用し得る資材にもとづくときは、インド工業は若干の發展を見せたとはいへ、インドの天然資源に隠された潜勢力には殆んど手をつけたか着けない程度である。インドは少くとも六百億トンの石炭埋藏量をもち、その中五十億トンは良質で、しかも採掘容易と言はれ、コークス用石炭も百四十萬トンに上る。三十六億トンといはれるインド鐵鑛の埋藏量は、アメリカ合衆國のそれの四分の三にあたり、しかもアメリカの鑛床よりも良質である。年産百萬トンに上るインドマンガンの産出高は、ソヴエート聯邦につゞいて世界第二位の地位を占め、世界産出の六分の一に相當する。かくのごとく鋼鐵の生産材料が廣く備はつてゐるにもかゝはらず、インドの鋼鐵生産高は丁度今、世界總生産高の一%に達したばかりで、今次大戰

前の水準たる九十萬トンはインドにとつては一つのレコードとなつたとしても、それは殆んど云ふに足りないものであつた。

このやうに潜勢力が充分に活用されてゐないといふことは他の分野においても同様である。水力發電潜在能力は二千七百萬馬力と推定されてゐるが、これはアメリカ合衆國につゞいて世界第二位であるが、その實現力はアメリカの三三%に對して、インドでは僅に三%にすぎない。ボーキサイド（アルミニューム）鑛の埋藏量も尨大なものと知られてゐるが、インド自身に需要を感じなかつたことゝ船賃が高いといふ理由から、今年に至るまで全く利用されなかつた。

この潜勢力と實現率との鋭い對照は、多くのインド經濟研究者を惱した。ビューカナン教授は、彼の浩瀚な勞作「インドにおける資本家的企業の發達」の中で、このことを次のごとく要約してゐる。

「こゝに一つの國がある——工業生産に必要な全資源が備はつてゐるにかゝはらず、しかも一世紀以上もの間大量の工業製品を輸入しつゞけ、その工業はと言へば、他の國では機械も組織も高度に完成されてゐるといふに、最も單純な工場がしかもほんの僅かだけがあるにすぎないといふ國が。棉、黄麻、採掘容易な石炭、採掘容易でしかもきはめて良質な鐵鑛等の豐富な原料を持ちながら、またありあまる人口——適當な職業がないためにしばしば饑饉にまで追ひやられる人口をもちながら、またおそらくは世界に類のない莫大な金、銀の蓄積を持ちながら、また多くの商品が流通するすぐれた市場を國内および近接地に持ちながら——これらのすべての強みを持ちながら、インドは、一世紀後になつても、この工業によつては人口の僅か二%近くを支へてゐるにすぎなかつた」

このやうにインドがその工業潜勢力を實現し得なかつたことは、大部分、一世紀におよぶ傳統的なイギリスの帝國主義政策の犠牲によるものである。

イギリスに對する誤れるインドの傳統

第一次大戦前においてイギリスの政策を支配した觀念は、イギリスは工業的に發展した國で

あり、インドは原料および稅收入の根源として又イギリス商品の市場としてのみ維持さるべきだといふ傳統的な觀念であつた。十九世紀の終りの三分の一の期間に擴大された鐵道網もたゞこれらの目的を助長させるものに他ならなかつた。「新工業の創設や、政府補助金によつてインド工業を奬勵せんとする試みは、ホワイトホール（ロンドン官廳街）の反對をうけて完全に失敗した」（一九二一年政府報告による）大市場への近接と低賃銀を利用せんとした綿業は、イギリス綿布にたいする輸入稅の撤廢と機械の輸入にたいする五％の關稅賦課によつて最初の打擊をうけ、一八九四年インド製綿布の一切の國產稅が課せられた時、全くその成長を阻害された。

前大戰の起る直前に、ジョージ・ペイシュ卿は、インドに投資されたイギリス資本の總額を三億六千五百萬ポンドに推定し、この內「商業的および工業的」企業に投資された金額が僅か二千五百萬ポンドにすぎないことを指摘した。この數字に鑛業關係、補助產業關係を加へるとしても、第一次大戰前イギリスのインドにたいする投資額の九五％は、工業發展に全く無關係であつたと言ひ得るのである。

政府は第一次大戰と同時に、政策の完全な轉換を發表した。たとへば一九一五年、ヘーステイングス卿は「インドの工業能力を改善するといふ決定的な誤謬なき政策が戰後も引つゞき遂行せらるべきことは今や明かである」と述べた。また一九一八年モンテギュー・チェルムスフオード報告は「あらゆる根據から、工業の發展に關し、一歩進んだ政策を取ることが、熱烈に要求されてゐる。それはインドに經濟的安定を與へるためばかりでなく、インド國民の熱望を滿足させるためにでもある。經濟的または軍事的理由から、イギリスの當局者たちも亦、インドの天然資源がより効果的に利用されることを要求してゐる。工業化されたインドがイギリス帝國に附け加へるところの力は、まさにはかるべからざるものがあるであらう」と語つてゐる。

政府のこの態度は、戰後の好景氣時代にも繼續された。インドの景氣は他の國よりもはなはだしかつたので、イギリス資本は巨大な利潤を求めて集つた。一九二〇年ボンベイにおける主要綿工場の平均配當率は一二％であり、主要黃麻工場のそれは一四〇％――特別配當を加へる時は四〇〇％にも及んだ。一九〇八年――一〇年にインドへのイギリス資本輸出額は年平均一千四百萬ポンド――これはイギリス資本の總輸出高の九％である――と推定されたが、一九二

二年には三千六百萬ポンド（總額の四分の一）にも上つた。——これも不思議とするには當らないであらう。

かくしてインド工業に對するロンドンの好感は增加したが、このことは關稅政策の變化にも反映した。一九一七年棉花の輸入稅は七・五％に引上げられ、一九二一年には一一％に高められた。また一九二二年には一般輸入稅率も一五％に引上げられた。この傾向は一九二四年最高潮に達し、この年インド鐵鋼工業のために三三％三分の二の保護關稅と一種の奬勵金制度が設けられた。

しかしながら、イギリス政府のインド工業化に關する興味は、すでにこの頃薄らぎはじめてゐた。一九二一年の末に起つた經濟波瀾は好景氣の間に膨脹しすぎた多くの商社を破滅に導いた。一九二四年にはイギリス資本の流入高は二千六百萬ポンドに減少したのであつた。

インドを縛る關稅の網

一九二七年鐵鋼の保護關稅が更新された時、一般基本關稅稅率は低下させられ、補助金制度は廢止され、帝國特惠關稅の原則が導入された。綿業をのぞくインド工業の指導者たるタータ鐵鋼會社は、その完製鋼生產高を一九一三年の一九、〇〇〇トンから一九一八——一九年の一二四、〇〇〇トンに高めたにもかゝはらず、その百ルピー株が一九二六年までに十ルピーに慘落するのを如何ともすることができず、會社はロンドンにおいて二百萬ポンドの社債を募集せざるを得なくなつたのである。

一九二七年から第二次大戰の勃發に至るまでの間、イギリスの支配的な關稅政策となつたものは、インド市場においてイギリス商品に、インド製品や、外國製品以上の有利な立場を保證する——といふ帝國特惠關稅政策であつた。一九三二年、廣汎なインドの抗議や、インド立法議會の反對投票を無視して、オツタワ協定に從ひ帝國特惠關稅制度がインドに强制された。一九三三年綿業にたいする特惠政策に反對したインド關稅局の報告は無視された。インドの反對は、一九三五年インド立法會議が特惠制度を擴大する貿易協定を否決したときに、もう一度感じられた。だが、この投票も無視された。同樣にして、一九三九年三月インド、イギリス本國

間の貿易協定は、インド立法議會におよびインド商業會議所聯合會の兩者によつて反對された。しかし再び議會の投票は無視され、貿易協定が强制された。

イギリス政府がインド工業の一般的成長に反對してゐる間にも、イギリス資本は投資に適する特別の機會を見逃しはしなかつた。例へば貿易委員會首席トーマス・エインスコーフは、一九二八——三八年間の新工業施設に關する報告の中で次のやうに述べてゐる。

「若干の重要な場合——特に煙草、マツチ、ゴムタイア、石鹼、塗料および幾つかの化學生品等に、イギリスその他の大會社が手を擴げた。けだし、關稅壁內の工場から、インドの需要に應じ、また政府の入札の際にはインド國產と主張し得る地位に立つことが便利と考へられたからである」

インド工業の成長が遲々たることは、國勢調査の數字を分析することによつても明らかである。一八九七年から一九一四年までの十七年間に、工場勞働者の數は五三〇、〇〇〇人增加した。ところが一九一四年から一九三一年までの同期間には、僅かに四八〇、〇〇〇人だけ增加したにすぎず。またこの期間に手工業勞働者の數は、輸入製品或はインド國內工業製品とも競爭によつて絕對的にも減少してゐる。一九三六年ロンドン・エコノミストは「工業に從事する人口の比率は、相對的に減少する傾向にあり、二三の工業——とくに黃麻工業及び綿業にあつては、雇傭勞働者の數に絕對的減少さへ見られた」と述べてゐる。

インド國民會議派は、かゝる事態に關心をもち、一九三八年十月會議派の支配する州政府の工業長官を集めて一つの會議を開いた。この會議は全インド計畫委員會を創設し、さらに一つの決議を行つた。「この會議は、貧困や失業の問題、あるひは一般に國防や經濟恢復の問題は、インドの工業化なしには解決し得ざるものと思考するものである」と云ふのである。

銀行もインド人を差別する

インド工業を支配するインド資本ならびにイギリス資本の相互關係についての詳細な、そして包括的な研究がない場合には、イギリスがこの分野において差しせまつた危險には直面してゐないことを物語つてゐるものである——少くともインドの穩健派までが立ち上るやうな危機

には直面してゐないかのごとく見へるだらう。

インド人資本家の牙城は、綿業、黄麻工業、さらに、最近までは鐵鋼業等であるからであるが、これらの分野にさへイギリスのすぐれた財力は重大な一鍬を加へつゝある。例へば、インド資本による企業中最も重要なタータ鐵鋼會社のごときも、一九三九年十二月にイギリス資本の支配するベンガル鋼鐵コーポレーション協定を結ぶに至つてゐる。しかし個々の工業に發展することよりも、もつと重要なことは、イギリス資本が代理經濟制度といふ獨特の制度を通じてインド經濟を全般的に支配してゐることである。この制度を通じて、比較的少數の商社が、種々の會社や、企業を起し、監督し、或る程度まで資本をあたへ、生産力を支配し、生産物を賣却することが可能である。この場合、會社や、企業の資本家はあまり大きな役割を持たぬ。利潤の大部分が代理經營人に流れるからである。この方面で非常に著名であるアンドル・ユール會社のごときは、黄麻、茶、石炭、運輸、保險、砂糖等十五種の産業部門に屬する五十四の企業を、代理經營し、あるひは、一部を所有してゐる。この方面にもインド人の商社はある。インド資本が最も多く投ぜられてゐる紡績業において、資本の半ばはイギリス代理人の經

營するところとなつてゐる。

インドには三つの銀行制度があり、それぞれ預金總額の三分の一を占めてゐる。半官的な金融機能を果す帝國銀行は明らかにこの分野を支配する。この重役は一九三六年において十一人がイギリス人であり四人がインド人であつた。一九三〇年發表の數字によればインド人以外の所有株は、拂込資本の五一％にすぎないのに、第二の爲替銀行は貿易金融を支配してゐる民間の銀行であるが、この關係の十七の銀行のうちインド資本にかゝるものは僅か一つであつた。（一九三六年調査）第三の株式銀行はインド資本の牙城である。

かくして、三つの銀行制度のうち二つがイギリスの支配下にある結果、インド商業界共通の不平は「人種的、政治的差別が信用關係にも用ひられ、一方ではインド人が擔保物件相應の信用をも與へられないのに反して、他方ではイギリスの商人が普通の商業上の原則では與へられないやうな大きな信用をしばしば受けてゐる」ことにあつた。

イギリスへの挑戰の第一歩

第二次大戰の起つた今日、インド・ブルジョアジーとイギリス・ブルジョアジーとの摩擦を清算することが最も必要な課題となつたばかりでなく、今こそこれを果すべき絶好の機會とみられてゐる。開戰迄各インド實業界は「戰爭によつて、いかに樂觀的な實業家でも三年前には夢想もしなかつたやうな新しい產業發展の途がひらかれるであらう」といつたやうな感情を一致して持つてゐたやうであつた。もかしながら、イギリス側は、この發展が自分達に負擔をかけることによつて、遂行されるのではないかと危惧を抱きはじめた。イギリスも人員はインドには充分に動員されなかつた。「イギリスが放棄した商賣を奪取しようと熱望してゐる競爭者が無數にあるから、インドにおいてイギリス貿易を維持するか、またはこれを增加せんとする人々は、すばらしい價値のある國家的な仕事をしてゐることになる」と、半官誌アジアティック・レビュは述べてゐる。

戰爭によつて幾つかの工業、とくに鐵鋼、紙、砂糖業等は利益をうけた。しかるにイギリス電信會社の理事長でありミツドランド銀行の頭取であるアレクサンダー・ロジヤースが、イギリス軍需省の代表者としてインドに來た時には、多くの不平をもつて迎へられたのである。

それは、インドの主要工業である綿業を例にすればよい。一九三九年八月には、綿業は非常に不況な狀態にあつた。宣戰布告と同時に價格は急騰し、一九三九年十二月には最高に達した。しかも、イギリス本國および日本の競爭が減退し、又相當な軍需品の註文があつたにもかかはらず、一九四〇年の夏までも多くの駐割のアメリカ領事サミユエル・エーチ・ウイリーは「工業勞働者の生計費增加と、農民に支拂はれる農產物價格の下落に歸してゐる。秋になつて、船腹不足がしだいに顯著となり輸入が減退したゝめに、事態は幾分改善された。同樣の事態がインドの第二の工業である黃麻工業にもみられた。黃麻工業は十億の砂袋の註文をうけてゐながら、一九四〇年九月から一九四一年三月まで毎月一ヶ月中僅か三週間しか作業してゐなかつた。かくて、インドの二大主要工業は戰時狀態から利益をうけてゐないことによつても、ロジヤースに對する反感が理解できるであらう。

インドにはこのほか數かぎりない不平がある。それらの一つ一つはさほど重大な意味をもつてはゐないけれども、それらを一束にすると一つの基本的な摩擦を示すものとなる。例へば、インドの海運關係者は、イギリス國籍の船舶には適用されてゐないでインドの船舶にのみ適用されるところの、積荷、運賃、航行に關する制約にたいして強く反對した。鋼鐵、銑鐵、およびアルミニューム製品に關する許可制は、イギリス側からは不足あるひは暴利をふせぐ手段として說明されたが、インド側からは工業化を妨害するものとして攻擊された。またインド準備銀行の頭取が、新しい銀行法によつてインド內の「非計畫的な」諸銀行の半數以上を不法とする必要がある旨聲明した時、これはインド金融資本にたいする新たなる攻擊であると解された。

超過私得稅もまた不滿の種となつた。これは配當六分以下の會社には課せられない。この法令は「ヨーロッパ社會のすべての方面から支持された」とアジアテイック・レビュー誌は報じてゐるが、インドの土着資本家は、これがイギリスの獨占大企業をのみ利するものとして、激しく抗議を行つた。

このやうに摩擦が增大した結果、インド中產階級のなかには、インドは戰爭といふ手形にたいして餘分に支拂ひすぎてゐる——と感じはじめてきた人達が多くなつた。本年の初頭、インドの財務長官たるジェルミー・ライズマン卿は「インドの防衛のため支出をさらに增加しなければならぬ時が近づきつゝある」と述べた。中央立法議會に、平時利潤以上の全利潤に、五割の稅を課するといふ一法案が提出された時、四十の貿易聯合會、ボムベイ株式取引所ならびにボムベイ商品市場は、これに對する反對を表明するため一せいに店を閉じてしまつた。

しかもイギリスはインドをあざむく

インド人のイギリスに對する不平の感情はそればかりではなかつた。總督は、マドラス市において「現在この國內において、種々の宣傳を行ひ、戰爭基金を嘲笑し、人心を惑はしてゐる多くの人々」に警告を發せざるを得なかつたこともその一つの現はれである。パンジアブ州の首相で親英的なシカンダー・ヒヤット・カーンはこの不滿の根本原因を最もよく感づいてゐる

一人である。「地方官憲の任務は、都市に住む裕福な人々を説明して彼等に割當てられた寄附金をパンジアブ戰時當局に納めさせることにある。地方官憲がこれに失敗した時は、あらゆる合法的な説得手段を用ひねばならぬ。私は失敗した時の重大さを思ふ」と言つてゐる。

このやうな不人氣の原因の一つは過去においてインド人が自分自身の叛亂を鎭定する費用を支拂はされたのみならず、實質上イギリス統治を維持するための一切の費用——非常に關係のない費用まで支拂はされたことを、彼等が知つてゐることに起因してゐる。例へばインドは支那や、ペルシヤにおけるイギリス人在外公館の維持費用、地中海艦隊費の一部、イギリス、インド間電信線の全費用、さらにロンドンにおけるトルコのサルタン歡迎會の費用までも支拂はされた。インドがシンガポール、エジプトその他イギリス領各地の軍隊維持費の一部を負擔するであらうことは、已に公表された。

しかしながら、意味深長なことは、インド工業家及び金融業者たちは、戰爭といふ手形の支拂を援助することにたいして、最近公然たる反對を叫びはじめた。これは、疑ひもなく、イギリスが、インドの工業化を妨害しつゝあるといふインド人同志の感情と深くむすびついてゐるからである。

この驚くべき反擊は、昨年十一月東方グループ會議が開催されてゐる最中に、中央立法議會において公然と開始された。追加豫算の審議中、サンタナル氏達は、政府の飛行機工業、自動車工業、造船業等に關する政策にたいして、激しい攻擊の矢を放つた。即ちサンタナル氏は、戰爭開始と同時に政府の補助金なしに、飛行機工場を建設せんとしたインド人達が、飛行機購入について政府の許可をうけられなかつたゝめに、空しく十五ケ月間も待たされたことを指摘した。自動車工業に關して、「インドの計畫經濟」の著者ヴイスヴェスヴアラヤ卿をはじめとする一流のインド人達は、政府がアメリカ商社と二十五ケ年の契約を結んで、インドの自動車工業建設の妨害をしたことを非難した。さらにサンタナル氏は、イギリス政府が一方に船舶の缺乏を力說しながら、他方インドに造船所を建設させないことを攻擊した。彼はシンディア會社が五年間、カルカツタに造船所の敷地を求めて空しく、遂にマドラスの近くヴイサガパタルにこれを得た例をあげてゐる。

イギリス政府がこれらの攻擊に惱んでゐることは明らかである。昨年十二月十六日發表の政

府コムミュニケによれば、政府はこれらの計畫に非常に同情をよせてをり、たゞこれを實現する方法に「かなりの困難」があることを表明した。だが、この後間もなく、最初の言葉に反してインド商工次官アラン・ロイド卿は「政府が造船業の奬勵を戰時對策の一部として積極的に遂行するほどの意志はない」ことを聲明した。注目すべきことは、政府の豫算案が中央立法議會によつて否決された理由の大半は、明らかにこの問題によると云つても過言ではないであらう。この議會の行動は過去におけると同樣皇帝代理によつて默殺されたが、この反對投票こそは、イギリスの政策——とくにインド工業化に關する政策——についての强い不滿を表明するものである。

インド解放の鍵はいづれにあるか

この不滿の原因は基本的な意義をもつてゐる。すでに記した諸事例は、さらにいくつかに追加されるのであらうが、これらはすべて、イギリスが生存をかけての必死の戰爭を行つてゐる時でさへも、またインドから援護物が決定的な近東方面戰鬪の形勢を好轉し得るかも知れない時でさへも、イギリスの政策は依然として自己本意の商業的な動機によつて支配され、インド土着資本の成育を妨害せんとする傾向にあることを示すものである。

昨年十月、イギリス軍需省派遣委員團の團長アレクサンダー・ロージヤスは、インド商業界の人々に向つて「あなた方は自分の手に帝國の鍵を握つてゐる。私達はあなた方がこの鍵を用ひられんことを希望するものである」と語つてゐる。この場合、イギリス自身が鍵穴をふさいでしまつたとも言ひ得る。だが、東方軍需品供給評議會は、インド・イギリス本國間に一つの新しい關係を齎すべき方途を拓く便宜を持つてゐるものである。

インドはイギリスの戰爭を果してまかなへるか

ヴエー・プーシエヴイツチアー・ジャーコフ

戰爭とインドの經濟情勢

一九一四——一八年の第一次世界大戰の經驗を基礎として、イギリスは適當な機會に、來るべき大戰に對するインドの準備方策の實施をすゝめることゝなつた。そのため一九三八年には、チャットフイールド卿を議長とする印度再建諸方策樹立のため委員會が設置された。そして一九三九年九月にはこの委員會の決議によつて、インド軍は增員および裝備改善を行ふことゝなつた。新たに、機甲部隊と、砲兵部隊が補充されることになつた。これに要する費用として、三千四百萬ポンドが支出された。

一方、軍の準備と併行して、對戰經濟準備もすゝめられた。第一次世界大戰當時においては、インド經濟の戰時編成替が行はれたのは、ようやく戰爭の過程においてであつた。當時におけるインドの工業は、極めて低い水準しかなく、軍事的意義をもつ若干の工業部門は、ようやく戰爭になつて發生し發達したやうな狀態であつた。一九一八年度における鋼鐵生產高は、

わづかに十五萬六千二百トンに過ぎなかつた。しかも開戰後三年目になつて、ようやく「軍需品局」なる組織が設立されて、軍需品納入の指導と、軍需工業部門の統制を行ふことになつたにすぎなかつた。

しかし、今次の世界大戰時においては、戰爭經濟基地としてのインドの役割は著しく增大した。これまでイギリスの支配層は、一般的にはインドの工業發展を阻止し、特にインドの機械工業が强化することを恐れてゐたのであるが、遂に今次の世界戰爭によつて軍事的意義を有する一聯の工業部門を擴張または創設せざるを得なくなつたのである。次表はそのインド工業の若干部門の進展狀況を示したものである。

	一九三三—三三年及び一九三三—三四年平均	一九三七—三八年	一九三八—三九年	增加率(%)
綿糸(百萬ポンド)	六六一・五	一、一五九・五	一、〇一七・二	七五・〇
綿織物(百萬ヤード)	一、七一三・五	四、〇八四・〇	四、二六七・七	一三八・〇
黃麻織物(〃)	一、一八七・五	一、九五二・〇	—	六四・〇
砂糖(千トン)	八四・〇	一、〇七二・二	—	一、一七六・四
セメント(〃)	一九三・〇	一、一六九・九	—	五〇六・二
銑鐵(〃)	四五五・〇	一、六四四・〇	一、五七五・五	二六一・三
紙(〃)	二五・〇	五三・八	五九・二	一一五・二
石炭(百萬トン)	一九・四	二二・六	二四・八	一六・五

●一九三八——三九年は十一ヶ月間の合計である

鋼鐵の生產額は、一九二三年の三十三萬七千百トンより一九三八年の九十三萬六千四百トンへ、すなはち一七七%の增加を示してゐる。かくのごとくにしてインドの工業部門は今次の世界大戰に入る前に著しい發展をとげたと同時に、經濟諸資源の戰爭目的への利用の可能性も、著しく增大してゐた。

また開戰前に、インド經濟の編成替に關聯する諸問題を處理する所謂「軍需品供給統制委員會」が設立された。戰爭がはじまると、既存の諸機關が廢止されて、軍需品供給局が設立された。それは軍需注文の割當てを決定し、その實施狀態を監督する權限を掌握するためである。またこの他に、軍需資源の增產指導および輸出ならびに價格の統制を强化するために經濟資源

局なるものも設置された。

かくのごとくにして、早くも開戰前より政府は軍需諸部門の增產に拍車をかけた。特に力を入れたのは、ジアムシエドプールにあるインドの銑鐵および鋼塊生產の六四%を占めるインド最大の製鐵企業「タータ一」の擴張であつた。一九三九年十二月に、この工場では、新熔鑛爐（「A」爐）が操業を開始した。その生產能力は、毎日銑鐵一千瓲である。この熔鑛爐の火入れにより、タータ一工場の爐數は五基となり、銑鐵の生產力は百二十五萬瓲餘となつた。

また同會社では、新鑄鋼職場および五十瓲平爐を敷設した。これによつて鋼生產高は二十萬瓲から增產しうるに至つた。また一聯の新壓延設備も敷設された。

以上のやうな生產力擴充の結果として、同會社は一九三九——四〇年には、鋼塊の生產を百萬瓲に、鋼材の生產を七十五萬瓲（一九四〇——四三年の間には八十萬瓲に）增產する計畫である。この擴張計畫が實現の時には、鋼塊——百二十五萬瓲、鋼材——九十萬瓲を生產しうるやうになる。

一九三九年の十一月には、新設のベンガル鋼鐵會社に所屬する新製鋼諸企業が操業を開始した。その鋼生產高は一九四〇年はじめには、一週間に一千三百瓲に達した。

戰爭はまた、諸種の冶金工業部門の發生をも速進させた。インド政府は、アルミニユームの生產に對する緊急諸方策を實施してゐる。アルミニユーム工場は、計畫によると、すでに一九四〇年末には操業を開始した筈である。

チヤツドフイールド委員會の決議によつて「戰時軍需品自給計畫」がはやくも開戰前に作成され、軍需工場の擴張ならびに新建設に關する諸方策が講ぜられ、官營の軍需工場も急速に發展することゝなつた。即ち一九三六年六月十四日の「タイムス」紙によると、最新の兵器ならびに爆發物を生產する八つの新工場が設立され、インドの「キヤピタル」誌は、一九四〇年八月ジヤハルプール大砲製造工場は操業を開始し、ゴツシプールの航空機用爆彈製造工場は擴張中であると報じてゐる。また機關銃生產の準備作業も、活潑にすゝめられてゐる。インド軍の總司令官カツセルス將軍は、開戰後九ケ月間にインド工業生產高は前年と比較して六乃至七倍となり、なかんづく彈丸の生產高に至つては、十二倍以上に增加したと聲明した。

軍需工業の擴張とならんで、各種工業の軍需工業への轉換も急速に行はれた。タータ一の諸

工場を筆頭に一聯の企業が銃や彈丸を生産するために轉換した。鐵道工場の多くもタンクおよび裝甲自動車の生産をはじめたとの情報もある。また政府の專門委員會は、日に約百輛の生産可能な大機關車工場の建設を發表した。ジヤマプール（東印度鐵道）またはカンチラパール（東ベンガル鐵道）にある現存の諸鐵道工場を足場にしてこの計畫はすゝめられてゐる。

戰前には、インドには自動車工業は存在しなかつた。それがアメリカのクライスラー商會とボムベイ資本家達との間にクライスラーの各種型を生産する自動車工場をインドに建設することが成立し、一九四一年上半期より操業を開始した。

また造船工業も今次の戰爭以前には存在しなかつた。イギリスはあらゆる方法によつてインドにおける商船隊（河川用船舶をも含めて）發展を阻止してゐた。戰前のインド海運において、イギリス商船隊の占めてゐた割合は六四・二%、諸外國が三四・五五%、インド自身としては僅かに一・二五%にすぎなかつた。しかるに今次戰爭がはじまるや否やイギリスはインドに造船業を起す必要にせまられ、一九四〇年はじめにカルカツタに造船ならびに修繕ドツクを建設することを許可したものである。

インドの化學工業も、極めて貧弱なものであつたが、これも開戰と同時に著しい躍進をとげた。ジヤムシエドプールには骸炭爐に附屬してベンゾールおよびトルオールの生産設備がなされ、ボンベイのターター化學工業企業が建設され、ターター化學工業會社自身も、パロダー大化學工業企業を建設中である。ミトルプールの企業は、アルカリ類、化學肥料、藥品等の生産をなし、カルカツタの附近には苛性ソーダおよび鹽素の工場が、又バンジヤブには炭酸ソーダ工場が建設された。

次に飛行機を生産する工場もバンガロールに新設され、一九四〇年には內燃機關製作工場が操業を開始し、アリプールには官營の電話製造工場が、また防毒面を生産する工場が設立された。これは先づ第一期として防毒面——日産八百個の生産といふことになつてゐる。

かくのごとく開戰以來インド工業の急速なる發展ならびに適時なる戰爭準備諸方策の實施が、イギリス政府をして開戰即日よりインドに軍需工業諸部門の生産物を利用せしめることゝなつた。

黃麻工業は莫大な軍需注文をうけ、開戰後の數ケ月間に軍需向け生産に完全にスイツチを切

換へた。開戰後六ケ月間に、インドの黃麻工業が、英本國、ニュージランド、イラク、南アフリカ、アデン、ビルマ及びインド國内に供給した軍需向け黃麻袋は約十億に達した。この金額は一億一千五百萬ルピーと稱せられてゐる。綿業もまた軍需生產に動員された。一九三九年に綿織物工場が受けた注文は、軍服地——三百五十萬ヤード、その他の布地——二百萬ヤードであり、その金額二百三十萬ルピーである。また一九四〇年には帆布の注文が四百六十萬ルピーあつたとも報じてをり、毛織物も完全に軍需注文の充足に振當てられ、その軍需注文は餘りに莫大なため手工業まで動員せざるを得ない狀態である。

冶金工業は、兵舍建築用の鐵筋——約三百萬ルピー、またエジプトより鋼鐵——十萬三千英ポンドの注文を受け、一方鋼板の注文にも應じねばならない有樣である。

開戰より一九四〇年七月に至る間に、インドより英本國に送られた軍需品は小銃彈——七千七千五百萬箱、砲彈——二十萬發、軍裝——一萬組、毛布——六十萬枚、軍服地——三百萬ヤード、軍靴——十五萬足、外套二萬着等であつた。最近の調査によればインドは近東より石炭の注文をうけてゐる。一九四〇年九月にはイラク、アデンおよびその他の近東諸國より木材の注文を、エジプトより黃麻をうけてをり、また新設のインド造船所は小型軍艦を建造してゐる。

以上に極めて不完全ではあるが戰爭初期にインド工業がいかに軍需向けに編成替されたかの跡を辿つた。部分的な資料しかないので、その金額を知ることは困難であるが、それにしてもインドの工業が第一次大戰の時に比して、英帝國の戰時經濟にとつて如何に重要な役割をもつに至つたかを推察するに足りるあらう。

戰爭の今後の發展、なかんずく地中海沿岸における軍事行動の展開および太平洋における戰爭の發展にともなひ、英本國および英帝國の軍需充足にとつて、インド工業の役割がいよいよ重要性を增すであらうことは疑ひない。

戰爭の進展と外國貿易の變化

戰爭はまたインドの外國貿易にも著しい影響を與へた。まづ第一に、戰爭の結果としてイン

ドの輸出貿易は著しい増加を示した。一九三九年四月——一九四〇年三月の一ケ年間にインドの輸出は二六・二%増加を示し、輸入も僅か八・五%ではあるが増加してゐる。これは主として、軍需に關係ある諸品目の輸入、例へば食料品（穀物、豆類、麥粉）の八千萬ルピー（五八%）がたの増加であるが、その大部分は軍需食糧のストックに向けられたのである。また石油製品および植物油の三千萬ルピーがたの輸入の増加、化學工業品の一千八百萬ルピーの輸入、これらはすべて戰爭と關係深いものである。

輸出の増加は、イギリスがインドの經濟資源を戰爭目的に利用し始めたことに起因することは言ふまでもない。イギリスの軍需注文の結果として、特に輸出の増加が顯著なのは、黄麻および黄麻製品である。黄麻製品の輸出は八五・六%（二億六千三百萬ルピーより四億八千八百萬ルピーに）黄麻は四八・八%（一億三千三百萬ルピーより一億九千八百萬ルピー）の増加である。また石棉の輸出は二五%（二億四千七百萬ルピーより三億二千萬ルピー）綿裝品は二一%（七千百ルピーより八千六百ルピー）の増加である。

現在、激化しつゝある戰爭は、第一次世界大戰におけると同樣に、イギリスの支配層をして、軍事的ならびに政治的意圖からして、インドに軍事的意義を有する若干の工業部門の發展の促進を餘儀なくさせてゐる。インドの實業界はこの點に大きな期待をかけてゐる。即ち「今次の戰爭は、わが國における新興工業諸部門の發展、ならびに現在工業部門の基礎强化に大なる貢献をなしつゝある。私は、今次の戰爭はわが工業經營者諸君に對して、民族工業を整備する餘裕を與へてくれるのであらうと信ずるものである」とインド工業聯盟議長マドハヴラル・ブハトは言つてゐる。

開戰以來、インド工場の諸部門に與へられた莫大な軍需注文は、インド民族の資本家に莫大な利益をもたらしてゐる。新聞の報導によると、開戰以來の軍需注文によつてインド工業は平均して一日に百二十萬ルピーの利益をあげてゐる。そしてこのことは、インド民族ブルジョアジーの英帝國主義との妥協傾向を著しく强化してゐる。

インドを欺瞞者としてのイギリスの自殺

スイオドア・ドライザー

イギリスの殖民地獲得法

イギリスは過去において、狭猾、陰險な手段と意圖のかぎりを盡して多くの殖民地を獲得した。それは利益のためには手段は選ばないといふ彼等の合言葉によつてゞある。彼等は帝國主義的掠奪のためとあれば、いかなる距離をも遠しとせず、地球上至るところにユニオン・ヂャックの旗を打ちたてた。その頃のイギリスは世界一の海軍國であつて、この海軍が握つた世界の制海權によつてこの大業を成就したのである。殖民地が増すにつれイギリス帝國の維持は次第に複雜になり、難事業とならざるを得なくなつた。

即ちインドを保持するには、エジプト、スエズ、ジブラルタルを制してゐなければならなかつた。インドへの道である地中海の通過を安全ならしめるためには、マルタ島とサイプラス島の海軍根據地が必要であつた。イラクを支配しなければならず、ペルシヤ灣沿岸の酋長連中を「宜しく懐柔てをく」ことも必要であつた。又、マレー、オーストラリヤ及び在支權益を保

持するにはシンガポールと香港に基地を持たねばならなかつた。東インドの所有者オランダが弱體化されかつ、屬國的地位に置かれたのはこのためであつた。また、ジブラルタルの先端から追拂はれぬやうにするためには、ポルトガルとスペインをあまり強くしては都合が惡い、それは西、南アフリカの自國領への通路を確保するために大切である。と同樣に、日本の强國化を抑止できぬとすれば、友好的關係を結んでゐなければならなかつた。

以上のことは今世紀の最初の十年までは、なし得たことであり、事實極めて有效に行はれた。イギリス帝國の交通線の自由確保に要することはすべて手に入れることができた。掠奪した領土を護るには、益々强大な海軍が必要となつたが、これは支拂ふ金より掠奪した物の方が多いので、別に金に困るやうなことはなかつた。

そこで、イギリスは白衣を身に纏つて、その帝國內の防備なき貧しき人民に對する正直な保護者であるといふやうな態度を見せはじめた。いかにも保護にはちがひないが、しかしこの人々の受けた保護は、哀れな、いかなる意味の防備力もないシカゴの小店主たちがアル・カポネから受けた保護と同種類のものであつた。彼等は、カポネに五十セント分の保護をしてもらつ

た代償として一ドル支拂はされたのである。

殖民地の重荷に惱む今日

だが、自然律の證明なる歷史は、屬國民を强壓的に搾取、抑壓する國がかつて永續した例のないことを物語つてをり、一方、他民族の自由を奪ふ國自身の人民も自由たり得ないことを告げてゐる。即ちギリシヤの莊嚴、ローマ、ペルシヤ、ビザンチン帝國、蒙古帝國、スペイン、ポルトガル、フランスの榮光等何れも跡方なく消え失せてゐる。巨富は頂點に達すると衰微を生み、極貧はどん底に達すると不穩を生む。これは月曜日の次ぎに火曜日のくるやうに避けがたいものであつて、かゝる國が最後をとげる方法は、その國自身の中の苦しめられた人々が林檎車を顚覆させるか、敵方の新興勢力が同じことをするか、二つしかない。

イギリスの支配者たちが彼等の帝國を新種の帝國と誇稱してゐるのは言ふまでもない。われ〳〵の聞されるところでは「イギリスの紳士は屬領といふ重荷を負つてゐるのだ。帝國は弱少

民族掠奪手段でない、各民族が平等な協同者としてイギリスと並んで一人歩きのできるやうになる日まで、おとなしく、辛抱强く、力を養ふ場所、即ち『ユモンウエルス・オヴ・ネーションズ』である」といふことになつてゐる。

これに對して重荷になつてゐる屬領の方は、もう一人歩きがしたいと言ひ、イギリスの方はまだそんなことができるものかとなだめる。すると屬領の方は、それは嘘だ、一寸の間でも下に降してくれゝば立派に證明してみせる、と。しかし、イギリスは、駄目だ、時期を誤らぬやうに辛抱するんだと言ふ——大體これがイギリスとその屬領との關係の現狀なのだ。これによるとある意味ではイギリス帝國が新種の帝國であることを認めなければならない。といふのは、これを自稱した最初の帝國はイギリスであるといふ點ではいかにもさうだからである。他の帝國は何れも掠奪の動機を糊塗しようとしなかつたし、イギリスにしても最初の頃は同樣であつた。しかし、一たびイギリスがこの新主張を行ふと、事實を知る手段を具へられぬ、あはれな何百何千萬といふ人間、殊にわれ〳〵アメリカ人はすつかりそれを信用して、イギリスを、彼等の我田引水說はもちろんのこと、事實においても、新しい帝國であると考へてゐるのである。

そしてまた、この主張を行つたイギリスの「自由主義貴族」の說得力の强いこと比類稀れであるけれども、イギリス人といふ人種は白は黑であると他人を言ひくるめようとするより先づさきに、自分を說得することをお家の藝としてゐるから一層始末が惡いのである。

インドを非人間的に扱ふ紳士

「デモクラシー」を一枚看板にして第二次世界大戰を苦戰してゐる、イギリスの僞善的假面の一例として、インドの現狀の一部を抽出してみよう。

イギリスがインドに自治領の身分を與へる意志を持つてゐないことは、歷代の政治當事者の言明にもあるとほりである。現在インドが空手形でなしに實際に與へられてゐるものは、一九三七年四月一日、いかにも恩惠を施すやうに大仰な態度で施行された憲法だけである。この憲法下にあつて、彼等は幾多の州議會をもつてゐるが、インドの四分の一を占める廣大な地域で

は、昔なからの封建制度が行はれ、將來名目だけの議會が與へられるといふことになつてゐる。

これがインドにおける、お馴染みの「デモクラシー」である。この憲法については萬人周知のとほりであるから、インドの指導者たちが、「人爲的にでつち上げられた民族間の分立を公認且つ永久的存在たらしめる新憲法はインドの現狀を惡化せしめるのみである」と語つてをり、又、もつとも穩健なガンヂーすら「イギリスはインドに巧妙極る制度を設けた。外見はいかにも尤もらしいが、これは裸にしてみれば高度に組織化された軍事的支配に他ならない……收稅官と警察が、知事の發令一本で大臣を免職することも、彼等を逮捕して留置所に入れることもできるようになつてゐる。」と難詰してゐるところでも明らかであらう。

インドにはデモクラシーなどは全然ない。それはイギリスの治下にあるかぎり將來永久的であらう。また、英本國の人民とても、イギリスが弱少民族に對する抑壓を中止する日までは、眞の意味のデモクラシーは與へられないであらう。かつてチエムバレンやチヤーチルが「哀れな」チエツコスロヴアキアや、ノールウエー、フインランド等に注いだ涙は、僞善の最たるものであつた。この紳士たちが抽象的理念としての自由、デモクラシーを信仰してゐると本心から考へてゐようとも、最も適切な見本はインドにある。インドは彼等の言葉の實證を求めたが、得たものは實體の伴はぬ約束だけであつた。前大戰中その約束が與へられて、百萬以上のインド人がイギリスの側に參戰したが、約束は見事に破られたではないか。「インドはイギリス帝國のリンチ・ピンである。もしインドを失へばイギリスは崩壞しなければならぬ——先づ經濟的に、そして政治的にも」とロザミア卿の言ふとほりの理由で、どんなに本心からインドに自治を約束しても、必ず破らずにはゐられないのだ。

私はロサンゼルス・タイムス紙上で「戰爭問題に對するインドの感情は頗る反ナチ的である。このことは一九四〇年九月中旬インドの指導者たちが自發的に對英援助の誓約をしたことに反映してゐる」といふ文章を讀んだことがある。土侯たちがかやうに忠誠を盡すのは、いかにもすばらしいことのやうに考へられるが、これは彼等が、イギリスの軍隊の力と分割支配政策によつて搾取し放題の豪勢な生活をさせてもらつてをり、イギリスの保護なしにはひとり立ちが出來ないからであつて、その彼等がイギリスに忠誠を擢んでるのに何の不思議があらう。

しかし、インドの民衆はいさゝかの反ナチ感情も懐いてゐない。彼等は、かりにナチに支配される日がくるとしても、いまより悪い運命の星の下に置かれるとは考へられないのである。私にも到底さうは考へられない。

では、一體彼等はイギリスからどのやうな生活を保障されてゐるであらうか。インド一流の經濟學者シャア氏とカーンバータ氏によればかうである——「普通インド人の收入は人口三人に對して二人が食へるにすぎぬ。即ち、彼等すべてが三度の食事のうち二度だけ食べられるに過ぎないものである。しかも彼等は一人殘らず裸體で、一年中戸外で生活し、いかなる娯樂、厚生施設も與へられず、粗惡極まる、榮養のほとんどない食事以外何も食べないといふ條件の下において、はじめて右の分だけ食べられるのである」

萬事がかふいふ狀態であるから、小兒死亡率の高いことも驚くべきである。ボンベー政廳の命を受けて調査を行つたあるインド人女醫の報告によると、インド人の小兒死亡率は千人につきイギリス人の五七に對し五二四（一九三三——三四年）を示してゐる。平均壽命は國際勞働局の調査によれば、一九二一年二四・八年、一九三一年二三・二年と低下してゐる。これは百年以前には三〇年であつた。疾病も驚くべき著增ぶりであつて、一九二八年、ベンガル洲保健長官は「農民は大半、ネズミですら數週間と命が持つまいと思はれるやうな粗食に甘んじてゐる」と報告してゐるほどである。性病患者は一千三百萬、食物不足が原因の半盲乃至盲者六百萬、同じ原因による佝僂病患者二百萬と算せられてゐる。病院の病床數は人口四千五百人につき一箇、普通のインド人は日收二セント乃至三セントとされてゐるにもかゝはらず、麻織維工業部門のイギリス人株主の儲けは、一九一五年から一九二四年までの十年間で三億ポンド上つてゐる。一年當りの利益實に九〇パーセントである。

別の點で引用する價値のあるのは、コリアーズ・マガヂンの記者が最近書いた戰時狀態下の報告であるが、それによると、現在のインドでは、民權の眼目といふべきものすら廢止されてゐるため、監獄が滿員になつてしまつて、もう新しい罪人を入れる餘地がなく、そこで警察は新手の方法の一つである集會破りに棍棒で人々の膝の骨を叩き折る手段をとつてゐるさうである。かうすれば、彼等が幸ひに「家」に辿り着けたとしても、好むとこのまざるとを問はずそこにぢつとしてゐなければならないからである。

イギリスの自殺

もし、かゝる僞善と暴虐の上に立てられた國家が存續してもよいといふならば、われわれは、住みよき世界の建設を目指す一切の努力、さういふ世界は可能であり、程遠からぬ將來に近づいてゐるといふ信念を一切拋擲せざるを得ないであらう。イギリスが自己の利益と特權の防衛以外の點では一貫して矛盾撞着を極めてゐる例は枚擧に遑がないが、この一つだけ擧げても、ヨーロッパでは「デモクラシー」のために戰ひながら、アジアでは宥和してゐるのではないか。また一九三九年八月十一日「租界との他の在支權益を一時放棄する覺悟で支那を援助しなければならぬ」と呼號したウインストン・チャーチルはいかなる行動を示したらうか。それは言ふまでもなくイギリスの他の政治家も同じやうに、彼もまた、帝國主義の防衛を自分の手に握ると同時に、在野時代の左の言葉を忘れてしまつたではないか。

かくのごとく、イギリス國內に矛盾が氾濫しはじめた以上、歷史的觀點から見れば、同國が

自殺せざるを得なくなるのはもう時間の問題であらう。イギリスの特權階級は血の利潤でできた、澱んだ、臭氣紛々たる池の水を撥ね上げてゐる。去る五月、大兵器會社ヴイツカースは四年連續して今日でも利益配當を一割減としたが――これは、會社が、買へるものには相手の如何を問はず、多少に拘らず賣りつけて儲けた利潤に氣兼ねしての行爲などでは決してない。ドイツの兵器輸入をイギリスが正式に「禁」じてゐた、つい數年前にさへ、ヴイツカースはドイツの雜誌に同社製の武器の廣告を出してゐたほどであるからである。――あとは世間體を繕ふため、豫備金その他として積み立てたのである。

しかし、如何にヴイツカースと云へども、戰時に不可缺の化學工業を獨占してゐるイギリス帝國化學工業會社に較ぶれば、ほんの僅かなものである。何となれば、同社は一九三九年增稅後でも九百三十一萬三千四百八十五ポンドといふ尨大な利益を出した上、さらに一朝有事の際のために豫備金數百萬ポンドを積み立てゝゐる。そして――もちろん偶然の暗合であらうけれども、次のやうなことがある――ヴイツカースとイギリス帝國化學工業の重役、前重役、株主等數十人はみなウエストミンスターに議席を持つてゐて、彼等のいはゆる「デモクラシー」文

明の將來を愼重に審議してゐるのである。これが、私利に憑かれて領土を擴張し、同じく私利につかれて自らその咽喉元を搔き切つて死に近づきつゝある大英帝國の姿である。

今では、イギリスと他の國とが戰ふべきか、和すべきかなどといふことでは片附かぬ問題である。もし、イギリスが和を求むれば、イギリスは滅亡する。そして他の屬領とゝもに、イギリスは反亂によつてインドを失ふであらう。そして、日獨英が和を結ぶと戰ふとに關らず、日本は着々としてその進路を前進するであらう。

インドは如何に戰ふか

ヴエー・ブーシェヴィッチ
アー・ジャー コフ

反英運動の展開

インド工業資本家に利潤をあたへつゝある英政府の戰時經濟諸方策は、國民會議右派の英國指導者との共同行動に好個の動機となつてゐるが、反對に大衆の反英運動を強化する結果となつてゐる。

一九三九年九月にイギリス議會は、英印政府の權限を著しく擴大する「憲法補足法案」を可決した。その結果、インド總督は、戰時においては、新憲法に基き一九三七年に設置された州內閣を解散し、全政權を自己の掌中および各州知事の手に集中する權限を與へられることになつた。

開戰後直ちに、所謂「インド防衛法」が發動され、インド政府は政治、經濟（工業、商業、運輸を含む）の全部門に亘る權能を掌握するに至つた。これと共に警察當局の權限も著しく增大された。同法令は「防衛に反對する」諸事件の審理のため特別裁判所の設置を計畫してゐ

る。この裁判所は、何らの法的手續なしに、インド人を重刑に處する權利を與へられてゐる。

開戰直後、英政府はインドが交戰國なることを聲明した。そしてインド總督リンリスゴウ卿はガンヂーを招き、彼の對戰態度を闡明し、彼を通じて國民會議派に働きかけんとした。ガンヂーもまた、イギリスの對戰目的に贊意を表し、英帝國が滅亡すれば、インド解放の問題も自ら意義を喪失すると聲明した。この聲明は政府筋及び英國の支配者達の歡迎するところであつたが、インドの大衆には失望をかつた。

一九三九年九月十四日、國民會議派執行委員會事務局は、對戰態度に關する宣言を公表した。ガンヂーの反對にも拘らず、執行委員會事務局は、その宣言において、インドは自分の承認なしに捲込れた戰爭には反對する旨の意志を表明した。この宣言に基いて、國民會議派執行委員會事務局は英政府に對して、戰爭目的の聲明ならびに「インドがインド人の支配する自由國家なることの承認」を要求した。

この宣言は、イギリス政界に非常な反響を呼び、總督は、會議派およびその他の政治團體の指導者と交渉をはじめ、反會議派諸勢力の統合を企てんとする一方、英國政府の意圖を體する

英紙は、會議派は大衆の意志を代表したものでないこと、回教徒の大多數およびインド人の大部分が會議派の聲明に反對であることを極力立證せんとした。

英政府は、回教徒聯盟議長ジンナー、パンジャブ政府主席シカンダー・カーン、ベンガル政府主席ファヅール・ハツカを通じて回教徒聯盟をして戰爭支持を決議せしめるとゝもに、自由主義聯盟およびヒンヅー教もこれに贊成し、インド諸侯もまた英國の全面的支持の用意あることを聲明した。

がしかし、インドの大衆の反英運動は、戰時下を通じていよいよ發展的傾向を強めていつた。一九三九年十月二日におけるボンベイ勞働者九萬が反英運動のためにストライキを起したことは大きな意義をもつものである。このストライキに對する妨害は强硬なもので、新聞は彈壓をおそれて、それについての報道は一切掲載せず、企業家はストライキに參加した者より七日分の賃銀を差引く旨の警告を發した。

ストライキ當日は四十工場が朝から休業を餘儀なくされ、ボンベイの全大學は休校した「インドの參戰反對」のスローガンの下にデモと集會が催された。

十月および十一月には、投機の増大と物價騰貴に關聯して、勞働者のストライキおよび動搖がはじまつた。食糧や日用品の小賣物價は二〇——五〇%が昂騰した。カンプールでは四萬の紡織勞働者が、また十一月にはカルカツタでまた四萬の黄麻工業勞働者がストライキを行つた。當時黄麻織物工場は、大量の軍需注文を受けてゐたのである。さらにロンドンではインド船員がストライキを行つた。このため五百名のインド人が逮捕投獄された。

一方、農民運動も展開された。直轄諸州では「小作人デー」に約二千の農民集會が開かれ、三百五十萬の農民がそれに參加した。また、マラバル海岸地區においては、農民組合指導のもとに、幾多の反英集會が開かれ、數千の農民が參加した。

インド民衆を欺瞞する「白書」

一方では、大衆が積極的に反英運動を行つてゐる時、他方では總督と各政黨および土侯國の代表者との會議がすゝめられてゐた。總督邸に集つたものは、ガンヂー、ジンナー、ジャワハルラル、ネールその他五十二名に及んだ。

一九三九年十月十七日に、リンリスゴウ總督は、國民會議派の宣言に應へて所謂「白書」を發表した。これは、英政府の名において、戰爭完遂に寄與する目的をもつて、總督を議長とする全インド諸政黨と聲明した。そして、戰爭終了後までは憲法のいかなる改正も行はないこと代表者の評議委員會の設立を提案した。かくのごとく英政府は一方においては國民會議派の要求を決定的に却下し、他方においては回教徒聯盟の反動政策を大いに支援した。

「白書」ならびに、これにつゞいてゼトランドおよびサミュエル・ホーアの演說は、インド國民を大いに刺戟した。國民會議派指導部は、イギリスがインド國民の要求を却下したことは、今次戰爭の英國の帝國主義的性格を立證するものであり、從つて、インドは今次の戰爭には何らの關係を持つものではなく、また英政府との協調は不可能であると聲明するとともに、國民會議派のメンバーよりなる全州內閣に對して辭職を勸告した。

しかるに回教徒聯盟の英國遂隨者は、イギリスの援助の下に、國民會議派州內閣の辭職を、回教徒聯盟派の增大と民族獨立運動の弱化に利用せんと努めた。そして「會議派の壓政よりの

解放デー」なるものを施行したが、却つて回教徒大衆の支持をうけるどころか、幾多の回教徒團體の反對するところとなつた。

一九四〇年十月十二日に總督はボムベイオリエンタルクラブで「イギリスは戰後にインドに對して、三十年間イギリス軍隊を駐屯せしむるといふ條件つきで自治權を與へる用意がある」といふ意味のことを聲明した。この聲明は、國民會議派右派の代表者をもふくめたインドの上層部に滿足を與へた。これより國民會議派の妥協傾向は著しく強化され、ガンヂーも「それは兩國にとつて好ましい決定の萠芽をふくんでゐるものと思ふ」と述べてゐる。しかし、これらの妥協的風潮にもかゝはらず、國民多數ならびに國民會議派の平メンバーの壓力のために國民會議全體をして對英妥協の方向には進ませなかつたばかりでなく、定例の「獨立デー」には主要都市には反英デモや集會が行はれ、ボンベイでは五十の工場が操業を中止した。

インド民族の光鋭化と墮落する指導者

急速に度を加へつゝある物價昂騰に對する勞働者の暴動も、ます〳〵擴大しつゝある。それは第一次大戰の時の比ではなく大きいものである。一九四〇年三月、ボムベイの紡織勞働者十五萬が、反英ストライキをはじめ、賃金値上の要求を出して、六週間つゞけた。このためボムベイの關係工場六十五も操業を停止せざるを得なかつた。このストライキの顯著な一特徴は、婦人が特に積極的であつたといふことである。三萬乃至五萬の女子勞働者のデモや集會がひつきりなしに行はれた。

そして各種組合の携提運動も、この期間を通じて擴張された。紡織工業勞働者、鐵道從業員等の集會がナグプール、ショラプール等の都市で行はれた。さらにボムベイでは紡織工業勞働者の指導者の逮捕に抗議して、三十五萬の勞働者がストライキに入つた。そして四月十三日に、英國の來るべき攻勢に備へて組織力を保持するために、一時ストライキを中止した。

かくのごとくにして、反英運動は、開戰直後よりして廣汎かつ尖鋭なものであつた。一方、彈壓と逮捕も規模を擴げていつた。宣戰直後より、防衛法に基いてパンジャブ、ボムベイ、ベンガル等の諸州では、勞働者運動、農民運動および學生運動の指導者等が逮捕された。

かゝる情勢のもとに、ラムガルで國民會議派の年次大會が召集された。會議派議長として、回教徒であるアブール・カラム・アザトが、回教徒大衆の間における國民會議派の勢力を強化する目的のために選出された。大會の緊張した空氣は、その決議にも反映して、國民的反抗およびイギリス政府との妥協拒否に關する決議がその中心であつた。

しかし、會議派内部の反動的人物は、自己の指導的地位の維持をはからうとして、この決議の實施を澁つた。そのため左派に屬するスバス・チアンドラ・ボースを議長をする「非妥協ブロック」は「ガンヂーならびにその英帝國主義との妥協政策反對」を叫んだ。

一方、回教徒聯盟はラホールで大會を開き、北インドに回教徒自治國家「パキスタン」の設立を要求した。この要求は英國の大いなる歡迎を以つて迎へられた。しかし、これは回教徒の大衆の支持を得るに至らなかつた。

戰爭の進展とインド内部の動搖

戰爭の進展により、インド内部は動搖をせざるを得なくなつた。それはインドの上層部およびインテリ層に對英妥協傾向を强化した。ネールが「イギリスが死鬪を行つてゐる時インドが反英鬪爭を行ふことは誤りである」と述べた。

日本の新聞は「インド國民が獨立鬪爭の必然性を理解するならば、彼等は東亞に生起しつゝある諸事件に注目すべきである」と述べ、また「東亞における新秩序の建設を無視して世界新秩序の建設を意圖するは、空中に樓閣を建設せんとするに等しい」と言つてゐる。かゝる日本の態度がまた、インドの不安を著しく强化してゐる。

かゝる情勢は、國民會議派の將來の政策に關する同派執行委員會事務局の決議にも明かに反映してゐる。即ち「インドの完全なる獨立ならびにその第一段階として臨時國民政府の樹立」の承認を條件とする全面的イギリス支持を表明した。これに對する英政府の回答は「インドに對する獨立の賦與は問題がありやう筈がない。戰爭後可及的急速に自治權を與へることを約束する」といふことであり、そして行政參事會議におけるインド人代表者の增加、及びインド人代表の參加のもとに軍事評議會設立の用意があることを聲明した。

だが、これは國民會議派指導部を滿足させ得なかつた。そのためさきの條件つきイギリス支持案を撤回する聲明を發し、英政府の政策に不滿を表明した。

戰爭のその後の發展、戰場のインドへの近接につれて、イギリスの軍事——經濟基地としてのインドの役割は著しく增大した。最近數ケ月間に、人的、物的資源の利用に關聯するインドの壓迫が、著しく强化された。インド軍はいまや、イギリスの軍事行動に直接的參加を行つてゐる。

國際情勢の變化と關聯して、現在のインドの國內情勢は、開戰當初と比較して著しくイギリスに好都合なものとなつてゐる。がしかし、現在のインドの情勢は、第一次世界大戰とは著しく異つてゐる。一九一四——一八年の戰爭より今日に至る二十五年間にインドは大きな飛躍をとげた。反英統一戰線を基調として展開されてゐる大衆的民族獨立運動は、いまや新段階へと發展してゐる。勞働者層の役割は著しく强大となり、農民層もまたこの運動に捲込まれてゐる。

現在におけるイギリスの國內情勢ならびに國際情勢は、イギリスの支配層をして、インドにおける自己の地位の保持と、インドの戰爭援助の確保に汲々とさせてゐる。イギリスは、インドの指導者に政治的・經濟的讓步を餘儀なくさせられてゐる。もつとも、今日のところ、それは極めて僅かであつて、絕へず增大しつゝある要求を滿足させてはゐないが。また同時に、イギリスは民族獨立戰爭の破壞および彈壓强化による大衆運動の鎭壓に萬策を盡してゐる。

全國にわたる逮捕は强化された。例へばジャワハルラル・ネールまでがその一人である。イギリス政府は、大衆運動を誘發する可能性があるといふ意味で、個人的反抗すら恐れるまでになつた。これは、英國はなほ强力であること、インドに對する從來の「强硬方針」を變へる用意のないことを示威してゐるものである……。

しかし、インドの國內情勢の今後の展開は、今次の大戰の進展と、國際情勢の變化によつて左右されることが大きい。

インド國境地方もイギリスの空爆下に戰ふ

B・シヴア・ラオ

イギリスの空爆に世界は抗議す

イギリス軍が、インド西北部の國境附近の獨立のために起つた土民に對して空爆を行つたことは、當時、各國間に非難を捲起したが、イギリス政府はなんとかして、これらの土民の反英運動を鎭壓しようと苦心してゐることは事實である。

現在、イギリスの勢力は、西北邊境地方の三分の一を支配してゐるにすぎない。その中心地はペシヤワルで、同地域の人口は約二百五十萬であるが、それ以外の「獨立地帶にもこれとほぼ同數の土民が住んでゐる。そしてこの地方の種族は(註)モーマンド、アフリデイス、ワヂリス、マーサド、シンワリス、その他無數の種族によつてつくられてゐるが、いづれも爭鬪を好み、體格は頗る强健で、バザンといふ種族のうちには一夜のうちに三十哩以上も歩いて、早朝に襲擊を行ひ、そのまゝ休息もしないで、掠奪品や死傷者を運びながら引上げたといふ話などが殘つてゐる。勿論、今日の文明の恩澤には浴してゐないが、このバザン人などには、一種の

法律のやうなものは存在してゐる。

種族間の確執や羨妬は各地に見られるが、民主制を重んずる氣風があつて、比較的重要な問題の決定は、衆議によるのが普通となつてゐる。宗教はイスラム教で、これを信仰する念は極めて強い。

イギリス政府の無能

イギリス政府が、十九世紀の中頃、シク族からこの區域の支配權を得た當時は、これまでの方法に從つて、掠奪を罪したり、貧困者に金錢を與へたりした位のものであつた。それから新世紀初頭カーダン卿が總督に赴任するまで、イギリスの統治方法は頗る明瞭を缺くものがあつた。イギリス人のうちにも、この區域を放棄して、國境をインダス川の堤防とすべきであると唱えたものすら現はれたが、またこれに反對して、アフガニスタンとの境までを支配すべきであるとの積極的政策を唱えたゝもあつた。が、その國境附近にロシヤ人が現はれたことから、

イギリスの帝國主義が頭をもたげて、これが世界大戰の終了するまで續いたわけである。

一八九三年、モーティマア・デューランド卿がアフガニスタンと協定を遂げて、國境線を決定した。そして既にイギリスの勢力範圍下にあつた地方だけをパンジヤブ州に編入したが、その後一九〇一年に再びこれを分離して、同地方一帶を西北國境州なる一州にしたものである。

しかし、この地域の種族を、イギリス政府の支配下におく試みは嘗つて成功したことがない。イギリス人のいふ平和經營がどんなものかは、この區域に一歩入つて見れば直ぐにわかる。イギリス人が試みた唯一の「文明」の標章たる軍用道路は、土民のために破壞しつくされてゐる。比較的安全なのは各地のイギリス軍駐屯地附近だけで、しかもこれらを聯絡する道路は、軍隊の保護でもないかぎり危險この上もない狀態である。

一方、イギリス駐屯軍の生活と雖も、不安極まるもので、一夜のうちに電話の使用が全く不可能になることなどは決して珍しいことではなく、近年は土民義勇軍のやうなものを編成してゐるが、これとてもイギリス軍のために役立までにはならないであらう。

されば、イギリスは土民の反英運動の鎭壓のためには、各國から非難されつゝも、極めて狡

猾な方法によつて、依然として土民に對する爆擊をつゞけてゐる。しかし、この空爆も、この山嶽地方では、完全にその效果を發揮するわけにはゆかない。その上夏期に入ると黃塵が谷間を埋めるので、狙ひを定めることも出來なくなる。また爆擊を行つた村を建直すことも考へねばならないので、結局損失を蒙るのはイギリス側であらう。

インド國境民族とドイツ

現在の悲劇から、十五年來の「土民の福利增進」を實現することは絕體に不可能であらふといふのが、インド人一般の輿論である。しかし、今日ですらも、この地方には學校や病院などは殆んどないといつてよく、治水工事も行はれてゐない。これが完全に行はれるならば、インド市場へ相當數の果實類を送り込むことが出來るはずである。このやうな施設には土民も反對するものではなく、イギリス政府の誠意の問題であらう。

先年、インドの各新聞に、イビのファキルから、ネールに宛てた公開狀が發表されたがその

なかに、インド民衆を壓迫するやうな政策には絕體に反對であるとの文字があつた。西北國境州內にも赤シヤツ運動指導者があり、これら諸族の反英態度はイギリスがパンジアーブを併合して以來の傳統的なものであるが、今次戰爭以來更らに活潑となり、且つ尖銳化して來た。回教僧侶の他にも彼等を使嗾煽動する新手が現はれたからである。コングレス派と赤シヤツ黨がそれである。さらにイギリスの頭痛の種となつてゐるものは、土民の反英運動の激化とともに、モスコウより行はれてゐる。又は行はれてゐたであらうラヂオ放送である。

又、ドイツの春季攻勢の進展もその一つで、コーカサスにドイツ軍が迫つたら、イランでもアフガニスタンでも今日の潛伏的態度から眼ざめると同時に、インド西北境も反英運動に起上ることであらう。

註——ワヂリス族　イギリス政府が最もてこずつてゐるのがこの種族で、前大戰から引つゞき今日までにイギリスは數回大規模の討伐を行つたが、その效果は一時的であつた。討伐軍の主力が撤退すると彼等は元の狀態にかへり、治安維持のため駐屯してゐる土民隊、國境憲兵隊を尻目に蠢動する。一九三六——三八年の叛亂に際しては、イギリスは多くの日子と

百五十萬ポンドの金と、數多のインド兵を犠牲にして討伐したが、叛亂の指導者「イピの聖者」と呼ばれてゐる回教徒僧侶及び彼等の片腕であるその弟子シール・アリーを逮捕することは出來ず、彼等は今だにワジリスタンの各地で反英運動を行つてゐる。

アフリディス族　前大戰の時、メソポタミヤその他に派遣されたインド軍（註A）のなかに加つてゐたアフリディス兵が、敵に通謀したものがあつたため、インド軍より退けた。從來イギリス人がパターン族の中で最も好んでゐたのがアフリディス族であつた。一九三〇年この種族が大擧してペシヤワール市を襲擊したゝめイギリスは彼等の住む山麓に鐵條網を張りめぐらし、彼等を封鎖し、人々や家畜を餓死させる等極度の壓迫を行つたが、三五年に首長格がイギリス政府の條件を容れて屈服したのであるが、青年はそれに反對して現在なほ反英運動を行つてゐる。

モーマンド族　この種族はインドとアフガニスタンの兩領土に跨がつてゐて、アフガン側のものは絶へずインド側のものを援けるため、その討伐が他の種族より困難である。彼等もまた一九三六年以來、ペシヤワール渓谷方面を攻略することが特に甚しく、その都度イギリスの空爆に遭つてるが彼等の反英運動はいさゝかも衰へてゐない。

反英運動の指導者としてのネールとガンヂー

ジョン・ガンサー

ネールの成長

インドの反英運動で、ガンヂーについで重要な人物は、パンデイツト・ジヤワハラル・ネールである。この偉丈夫は、ガンヂーのやうな謎の人物ではない。彼は西歐人化したインド人であり、民衆運動の指導者となつた個人主義者であり、またインド民衆のなかに入つた貴族である。さらに現代人の心をもつ理性の人であり、熱烈なる理想主義者でもある。そこでイギリス人と戰ひながら、同時にインド人の保守主義とも戰つてゐるのである。見方によれば、二十世紀の精神に即しつゝも、インドを中世紀以前に引戻さうとして戰つてゐるのである。

彼は、一八八九年十一月十四日、アラハバードで生れた。父はモティラル・ネールといつて、インド有數の辯護士であり、また富豪でもある。幼時からイギリス人家庭教師の薫陶を受け、一九〇五年、十六歳の時イギリスへ渡り、ハロウ及びケムブリツヂに學んだ。在學時代は主として文學書に親しみ、ペイタアやワイルドの作品を愛好したといふが、同時に當時イギリスの

獄にゐたあるインドの反英運動者の辯護のために、法律書を讀んだこともある。尤も社會問題や科學に關心を抱きはじめたのは、それよりもずつと以前のことであつた。

一九一二年、二十三歳の時インドへ歸へつた。彼の政治生活がはじまつたのはその後のことである。彼は政治に關係せずにはゐられない立場にあつた。といふのは、一九一六年のインド國民會議派とマホメット教聯盟との提携などは、彼の父の邸でその交渉が成立したのである。それで間もなく國民運動に參加し、次第に激越な反英演說をするやうになつた。

一九一九年、彼が病身の母と妻とを北部のムツスーリへ保養に連れて行つた時のことである。偶然、その年アフガン戰爭が終つて、イギリス側と條約を締結するために派遣されたアフガン國の代表者が、彼と同じホテルに宿泊してゐた。そのため意外にも、彼のところへ地方警察から、アフガン人と言葉を交してはならないといふ命令が達せられた。これはイギリスにとつては、インド人とアフガン人がそのことについて話し合つたら都合が悪いためであつたのである。このインド人を輕蔑した態度に憤慨した彼は、最初は別に話をしたいとも思つてゐなかつたのであるが、わざと世間話などをしかけたのである。これがため、彼はこの地方から退去

を命ぜられた。かうして、インド人がイギリス人から、いかに多くの不法な處置を受けてゐるかが、彼にも初めてよく判つた。彼がイギリス政府と戰ふ決意を固めたのはこの時からであると言つてゐる。

イギリスの横暴と闘ふネール

ネールが、反英運動のために初めて投獄されたのは、一九二一年のことであるが、それ以來幾度投獄せられたか判らない。しかし監獄では、比較的寛大な待遇をうけ、つねに讀書や執筆をゆるされてゐたので、却つて政治問題研究の好機となり、そのため彼の思想がはつきりした形をもつやうになつた。

彼はインド問題を、單にイギリス政府とインド人との戰ひであるとは考へず、眞の敵はイギリス帝國主義であると確信してゐる。イギリスの帝國主義は、政治的要求と、もに、支配者としての横暴を物語るものであるが故に、これと戰ふことが愛國者である。といふのがネールの

信條である。そのため彼はインド人同胞のために、あらゆる手段をもつて、このイギリスの支配階級と戰はんとしてゐるのである。

彼は瀟洒たる紳士であるが、その友人たちの話によれば、この二、三年間は、精魂を傾けた運動のために急に老けてみえるやうになつたといふ。しかし、インド人としては背が高く、五呎十吋位あり、體格もガッチリしてゐるので、いかにもたのもしさうに見える。

インドにはインド人の首府といふものがなく、ガンヂーはワーダーに、ネールはアラハバードに自宅をもつてゐるが、國民會議派の中心地として重要な都市は、ボムベイ、カルカッタ、ルクノー、マドラス等である。六週間に一回開催される國民會議派執行委員會の會場も一定してゐないほどである。そこでネールも絶えず國内各地を旅行してゐるが、インド人なるが故に汽車はいつでも三等である。

ネールの妻カマラは、彼と同族の出であつたが、一九三六年に死んだ。生前から病身であつた。ネールは多忙の身であつたが、妻の轉地先きには常に見舞に行つてゐた。彼が獄中でのことであるが、イギリス政府からある一定期間彼が政治運動から手を引くなら、釋放して、病妻の看護に當ることを許可すると言はれたことがあつたが、その時には妻のすゝめもあつて、斷乎としてこれを拒絶したのであつた。

ガンヂーの影響によるネール

ネールには知人はたくさんあるが、眞の意味の友人は極めて少いので、よくその身の孤獨を悟ることがある。アメリカあたりではよく彼のことを「火の如き」といふ形容詞をつけるが、これは適切な言葉ではない。政治上の會合に出た時でも、彼の言葉の調子は、大學教授のやうにおだやかで、屢〻自分の失敗談を語つたり、政治には關係のない話題を提供したりする。かつて自らを評して「自分は東洋と西洋の混合體であつて、どこのものでもない」と言つたことがある。

彼は、非常な讀書家で、英詩に關する知識は豐富である。しかし宗教と神秘主義とを嫌ひ、「インドに限らず、世界各地の宗教、及び、それに類するものに對して自分は恐怖を感ずる。

故に、しばしばこれを否定し、これを根絶せしめたいと考へたこともある」と云つてゐるが、インドに宗教がなくなることは考へられないので、これに對して種々の反駁があるのは當然である。

彼はガンヂーのやうに變人ではない。だから、ガンヂーの性行不道德論には贊成しない。子供の頃には肉もたべたが、ガンヂーにすゝめられて、一九二〇年以來菜食主養者になつてゐる。煙草は時々手にする。酒も國外へ出た時には少し位飲むかも知れない。

彼は、政治上の仕事から報酬を得てゐない。それどころか、財產の大半を失つてしまひ、現在の生活費はすべて著述から得てゐる。彼の好きなものは、山、川、子供、氷河、上品な會話蝙蝠と百足以外の生物などで、嫌ひなものは、搾取、殘忍なもの、口先きだけ上品なことを云ひながら私腹を肥やすに忙しい人間、つまり多くのイギリス政治家のタイプである。

彼は「自分は他人の影響を受けることは嫌ひだが、知らず知らずのうちに、感化をうけだ人間が二人ある。それは、ガンヂーと、余の父である。もつとも、別な意味で、余の妻の影響をも受けてゐるかも知れない」と言つてゐる。

インドの寶

彼の缺點の一つとして、政治家たるべくあまりに上品すぎることが擧げられてゐる。彼は、インドをイギリスより解放するために戰つてゐるのだが、彼自身は、出身校のネクタイをつけたり、禮儀作法をやかましく云つたりするイギリス型の紳士なのである。

彼の勇氣と決斷力には感歎の他はないまた事務的手腕もあつて嘗つてはハイダラバートの名市長であつたこともある。またすこぶる勤勉で、監獄にゐる間に、六百十七頁の自叙傳の他に、その愛孃に宛てた手紙の形式による世界史千五百六十七頁を書上げた程である。ある選擧戰では、二十二ケ月間に十一萬哩を旅行したし、一週間に百五十回の演說もやつてゐる。

かくて一九三〇年以來、ガンヂーと相並んで、インドに於ける不世出の英雄として民衆からは「インドの寶」なる語で呼ばれてゐる。

彼の政治行動は極めて公平率直である。一旦正しいと信じたことは、いかなる障害があらう

とも敢然として行ふ。絶對に妥協しない。これは一面、彼の缺點とも云へる。その公平な態度を物語る例として、つぎのやうな挿話がある。

一九二八年のカルカツタ大會の時、この大會の議長は彼の父モテイラルで、モテイラルが起草したいはゆる「ネール報告書」――サイモン調査團に對する回答書の成立を投票によつて決定することになつた。ガンヂーはこれを支持したが、ネールは反對した。そして開票結果は彼の方が勝つたが、後で調べてみると、手續上疑問の點があつた。これを指摘すれば彼の方が不利になることは明らかであつたが、その儘にしてをくことが出來なかつた。そのために彼の意に反して、ネール報告書は成立したのであつた。

兩極端に立つ二人

ネールとガンヂーとの關係は、師弟關係よりも複雜したものである。二人は兩極端に立つてゐながら、お互ひに他を必要とし、また尊敬し合つてゐる。しばしば二人の不和が傳へられる

が、それは全く根據のないデマである。ネールはガンヂーを指導者として、ガンヂーはネールをその後繼者として必要としてゐるわけである。

ネールは最初、ガンヂーがやがては社會主義に向ふであらうと考へてゐた。しかし、いつまで經つてもそれは實現しなかつた。それで、ガンヂイが上流社會の支持を受けてゐることや、暴力を否定しながらも、資本主義を是認してゐることなどを不滿に思つてゐたのである。

しかし、ネールも嚴密に云へば、國民會議派の左派の指導者ではない。一寸意外ではあるが、彼は會議派の社會主義黨のメンバーでもない。ガンヂーの議席が右翼の中央にあるのと同樣に、彼の議席は左翼の中央にある。

ネールが、ガンヂーの無抵抗主義に從はうとせず、無抵抗のみに依つて、インドに勝利をもたらすことは絶對に不可能であると云つてゐることは事實だが、ガンヂーを心から尊敬してゐる心情は、その著書のいづれにも滿ち溢れてゐる。

「民衆を指導してゆくその驚くべき魅力と測り知られない力」と云ひ「インド人の性格を一變して、昔のみぢめな民族に、誇りと品性を與へ、民衆に力と自覺とを持たせ、インド問題を世

界の問題にまで引上げた」とも云つてゐるのがそれである。

オールはイギリス帝國主義とインド人を無智に墮す政策を憎んでゐる。しかし彼の知識はイギリスより得たことは素直に認めてゐる。イギリス人はガンヂイは恐しいものではないが、ネールを非常に恐れてゐる。それ故、インドの話になると、眞先きに「ネールに會つたことがあるか。どんな樣子だつたか、今、何をしてゐるか」と訊ねるのが習慣のやうになつてゐる。それほど、ネールの反英運動を恐れてゐるのであらう。

イギリスはインドに敗れた

ドイツチエ・アルゲマイネワアイツング紙

イギリスの新しいインド提案についてクリップスは、ふたゞび悲痛な解説的演説を試みたといふことは、彼の演説は長いものではあつたが、要するに形をかへたイギリス帝國の僞瞞政策にすぎないものであるからである。この僞瞞政策が、イギリスのこれまでの傳統たる懷柔策に一屢の光明をあたへたものであるかどうかについては、言明の限りではない。イギリス政府およびイギリス國民は、インド國民が自治を享有すると同時に、イギリス帝國と同じ憲法がつくられるやうになることを希望してゐることを、ロンドン政府は言明するものであるといふ意味のことをクリップスは述べたものであるが、この言葉の第一の部分はまつたくの虚僞であり、第二の部分は欺瞞である。

それは、今更ら説明するまでもなく、クリップス提案の詳細な點において、既に明かなやうに、ロンドンではインドに自由を與へることを援助する氣持ちなどは、爪の垢ほども持つてゐ

ない。反對に、むしろできる限り、欺瞞的策動によつて、再び（註一）最も大きな戰爭の犧牲たらしめんとする意圖を持つてゐるにすぎないのだ。

もし、かりにインドの憲法がイギリス帝國のそれのごとく作製されるべきであるとするならば、それはインド人がイギリスの持つてゐるものと同じ程度の國家的主權を享有すべきであるといふことを意味するものではないことは、言をまつまでもなからう。といふことは、第一に、もしインド人が自ら憲法を起草するとするならば、それは確實にインド的なものであつて、決してイギリス的なものにはならないであらうし、第二に、イギリスはインドに對してチャーチルとクリップスの恫喝で、外交政策にも國防問題にも何らの自由をまへもつて考慮しないのに、外國代理機關として、總督を置かないこと、又國防相をふくむ全閣僚は、その國民のうちより起つことができるといひながら、注目すべき特權を依然として享受するのである。

それ以上に、他の意識的な僞瞞は、クリップスの撰んだ文體に「漠然とした將來のために約束しなければならない凡てに當て嵌るやうなものである」といふ言葉のうちにすべて藏されてゐる。彼はこの言葉によつて、すでに現在迷信を呼び起さうとしてゐる。しかしガンヂーは彼がこの演說をする以前に、すでにイギリス案は先日付の小切手として見られるにすぎぬと、クリップスの面前で喝破した。これがインドにおける老政治家の態度である。他の若き代表者も、おそらくはこのことをクリップスに言つたことであらう。

いづれにしても、インド國民會議派全體の下に、いかなる標準をもつてイギリスの將來の變化を計るかといふことの明確性を明かにすることを固執したのである。しかるにクリップスは、この明確性を彼の意識的な不明瞭な詭辯でもつて胡魔化すことはできなかつたのである。個々の國民の階級、層、或ひは種族を相互に相反目せしめるために、又は個々の市民としてインド人の統一を主張するために、如何にイギリスがイギリスによつて好んでかき集めたインド民族の多樣性を犧牲にしたかは、他に類例のないことである。

このことをまたクリップスは、その演說によつて說明した。即ち、彼はソヴエトでも多數の民族や種族が一緒に生活してゐるといふことをあげて、これを明らかにインドに對する範例にしようと考へたのである。この人物から、かふいふ言葉を聞くことは額に敎訓的である。帝政ロシヤが、その國內の極めて多種多樣な諸民族を、如何に殘忍なる手段をもちひて强制的に結

合してゐたかといふことは人のよく知るところであり、またボルキシズトどもが、この似而非統一を維持してきたことも、人はその例に劣らずよく知つてゐる。しかも段等は一切の手段をえらばず、かつ國民的乃至個人的個性などには、一向におかまひしなかつたのである。

實際のことをぶちまけると、イギリス人はどうすればインド人を結合し得るかといふやうなことで、格別頭を惱す必要はないのだ。そのやうな懸念は、あはてずに政治的に目覺めたるインド民衆にまかせたらよいのだ。それはまた事實上、彼等の頭痛のたねとなつてゐるのは、いふところのインドの不統一ではなくして、むしろインドの民衆が自由への意志において一致してゐる點である。

イギリス人といふものは、凡てこんなやうに自由主義的でもあり、また民主主義的でもあるわけだ。彼等はまつたく前世紀初頭にドイツの統一を妨げんとしてライン同盟を作つた當時のフランス人とよく似てゐる。クリツプスがその演說の中で、インド人の眼を事態の推移からそらすことに躍起となつてゐることが手にとるやうに理解できるが、これは尤もなことである。何故ならインドの歷史はイギリスにとつて一個の汚辱であり、かつ一層の政治的關聯をすゝめるものだからである。しかしどのやうな注意を他に逸らせやうとする企圖も失敗に歸したことをインド人が最もよく知つてゐる筈だ。

註一・再び最も大きな戰爭の犧牲とは、前大戰においてインド人は、イギリス當局の發表によると三萬六千六百九十六名が西部戰線および東亞において戰死した。又、一九一四年——一八年にかけてインドは九十八萬五千名の兵を募集したが、その中五十二萬二千名はイギリス側の戰線が特に危險にさらされてゐたインド以外の地に配置されたものである。そして四十七萬二千名の中の大部分である三十九萬一千名のインド人が、イギリス人に戰線後方の軍事目的のために勞働者として、インド以外の地で驅使された。

即ち百萬のインド人の殆んど半數が、その生命と健康を犧牲にして、イギリスのために從軍したわけであり、さらにこれ以上にイギリスの戰爭のためにインドの財政負擔は三億ポンド以上であつて、當時の率から云へば六十億マルク以上に當る額である。前大戰のかゝる巨大な犧牲より以上な犧牲が要求されるやうな大きな戰爭に僞瞞のうちにイギリスがインド人を引込まんとするものである。

インドは千載一遇の好機を摑め

ベルソナー・ベルゼンツアイング紙

樞軸國と英米の軍事能力の現段階

イギリスでは國璽尚書のクリツプスがわざわざロンドンから、インドへまで出かけて行かねばならないかといふことは、何を意味するであらうか。これこそイギリス帝國の最後のあがきに外ならないのである。

一方、アメリカ國民はルーズヴェルトの軍擴案たるものが、實現不可能なるを體驗しなければならなくなるであらう。

ルーズヴェルトは、イギリス、ソヴエート、重慶政權、ドゴール派および南米に對して、決して約束せる援助は出來ないであらう。また同時に原料の不足と軍需工業の停頓のために自由なる軍備擴張のための必要品も生產出來ないことを知つてゐる。

なぜなら、東亞における日本の赫々たる戰利により、すでにアメリカは軍備上不可缺なるゴム、ヴオルフラム、錫の大部分を失つてゐる。ブラジルのゴム生產は數年後においてようやく

利用し得るにすぎない。アメリカの軍需工業もまた元來充分な生産能力を有してゐない。機械や熟練工が不足し、かつ、その他組織上甚しい缺陥に惱んでゐる狀態だ。

現在、米英の軍備能力および軍事的可能性と三國條約國およびその同盟國およびそれらの諸國によつて統制せらるゝ諸國のそれを比較し、その工業機能、軍備、軍備上の傳統、最高度に統制された熟練工の數などを考慮するとき事態は自ら明らかである。

即ち、アメリカは一億三千五百萬、イギリスおよびカナダはあはせて五千五百萬の人口を擁してゐる。即ちその人口總計は一億九千萬である。ソヴェートの軍備能力は單に第二義的な意義しか存してゐない。といふのは、ソヴェートの軍需工業地の大部分はドイツの占領下にあつて、殘餘は物資と熟練工の不足のために逼迫狀態にあるからである。

イギリス及びアメリカは海軍工廠を除いては價値と傳統をもつ軍需工場は少く、充分な軍需工場勞働者もなく、たゞ僅かに組立と軍需資材の檢査に若干の經驗を有するのみであつて、練達してゐる技術者は充分でなく適當な士官あるひは下士官の技術部隊もなく、近代戰の經驗あるひは軍事上の傳統も持ちあはせてゐない。就中、米英に缺除してゐるものは、明確にして、

統一的な戰爭目標である。

他方において、三國條約國の側においては、ヨーロッパにおけるドイツ、イタリーならびに爾國、およびその同盟國の軍備のために働きつゝある獨伊の監督下にある諸國は、總計約四億の人口を擁し、さらに日本はその東亞における同盟國をのぞいても一億の人口を有してゐるから、人口總數はざつと五億に達するわけである。これに加へて三國條約國は一世紀におよぶ傳統を持つ世界最大の軍需工場を用役してゐる。

數萬の熟練技術者、武士的傳統に生きる有爲の士官、技術官、近代戰に豐富な經驗を有する士官の他に將來のため戰ひつゝあるヨーロッパ民族の統一的な戰鬪精神がある。

日本に關しても同樣である。以上のことから三國條約國は軍需生産において如何なる場合においても、敵國側をはるかに凌駕してゐることが結論づけられる。資源に關していへば、三國條約國は米、英が太平洋において、またソヴェートが東歐において、その資源を喪失した今日においては少くともアメリカとその同盟國ソヴェートが有する資源能力と同等なものを有してゐる。

日本の戰勝とインド

ルーズヴェルトは彼の軍備計畫は來るべき數年間に始めて軌道に乘ると自ら稱してゐる。これに對して三國條紅國間に決定された大軍備計畫は一九四三年に入るとゝもに、尨大な擴張を見るであらうことは確定的である。

それにしても、ルーズヴェルトと、その同盟國イギリスとが、一億九千萬の人口と、拙惡なる軍備能力を持つて、如何ほどの陸海空の軍備をなし得るかは、こゝに割愛するとしても、三國條約國および、その同盟國は五億の人間と世界でもつとも高度に發達せる軍需工業によつて、何時の日にでも英米の軍備を根こそぎ擊碎し得ることは確實である。

以上のごとき情勢を反映した苦惱が、クリツプスをしてインドに赴かしめたものであらう。しかるに日本軍は、一向に捗らぬインド會談を尻目にして、既に、セイロン島およびベンガル灣沿岸の二都市ヴイザガパタム及びコカナダルに攻擊を加へてゐる。

なほその上日本軍はすでにアキアブルに上陸してゐるが、これによつて日本軍はガンジス河口及びカルカツタに對して直接脅威を與へるに至つた。

ガンヂス河口に對する機雷敷設も、インドのもつとも重要な貿易の中心地たるカルカツタの完全なる機能喪失化が、これによつて可能となるにいたり、日本軍の對印封鎖の輪廓がはつきりと表現された。これがあれほどにも人口過剩で、しかも全然自給自足をなし得なかつたばかりか、逆に大英帝國とのくされ緣のために經濟上まつたくイギリス海軍に依存してゐるインドにとつて何を意味するかは、何人も容易に判斷し得るところであらう。

この方面でも日本軍は決定的に有利な立場にあつて、イギリス側には、それを得るチヤンスが殆んど全くないと言つても過言ではない。日本において、東條首相は、今一度インドに手をさしのべ、彼等に對し、イギリスの誘惑を斥けて、その代りに、インド人のインドを、實現するための「千載一遇の好機」を摑むやう警告してゐるが、その場合、日本のかゝる軍事力を完全に意識して語つてゐることを、理解しなければならないことは言ふまでもないことである。

大東亞戰爭とインドの眞相

東亞經濟文化研究所

大東亞戰爭とインド自覺

大東亞戰爭の勃發以來、皇國陸海軍の赫々たる武勳は、早くも太平洋における米、英の武力に、決定的大打擊を與へることが出來た。云ふまでもなく米、英は今後ともその全力を傾倒して頽勢の挽回に焦慮するであらう。しかしながら、武力戰に關するかぎり、海上權力と、空軍勢力と、就中軍事基地の大部分を失つた彼等が、近き將來における反擊の機會は絶對にない。かくのごとく大東亞戰爭における日本の制勝は、世界の歴史未曾有の大轉換をもたらす重大事件であつて、今や世界情勢は、ひとりヨーロッパと東亞における獨立せる局面のみならず、實に兩者の複雜なる交錯の上に、新しく巨いなる多くの問題を生み出さんとしてゐる。かゝる時、インドの運命は、世界史變革の過程にあつて、彼等がかつて經驗するところなき重大な政治的意義を帶びるに至つた。何となれば、インドはひとり、英國の東亞侵略の最大據點たるのみでなく、

「若しも、われわれが英國の轄(くさび)たるインドを失ふならば、大英帝國は先づ經濟的に、次いで政治的に崩壞せざるを得ない」

と、ロザーミアー卿の言葉のごとく、インドは、今日既に大英帝國を構成する中樞體をして存在するものであり、しかもそれがインドとインド民衆の荒廢と搾取の過程をのみ通じて可能なるところにインドの悲劇的運命がある。世界大戦の局面は恐らくインド洋の制壓成りし今日、近き將來において直接この運命の國にのびるであらうことは決定的であつて、今やアングロ・サクソン國家に對する鬪爭の天目山は、一にこゝにかゝつてゐるのである。

前大戦と今大戦の軍備の差異

しかも「英帝國の冠に飾られたる寶石、インド」は、その言葉によつて表されたごとくインドはイギリスの寶庫である。そのため一昨年開催されたイギリス屬領東方圏會議は、兵站基地としてのインドを濠洲、南阿聯邦以上に評價した。この意味からしても、今日インドを失ふことは英帝國の抗戦力にとつて致命的打撃であると言へる。さればこそ、クリップスの派遣があつたものである。この英印交渉はイギリスにとつて不幸な結果に終つたが、インドにとつては新しい歴史の發足である。

前大戦においてインドは兵籍に登録せるもの戦鬪員九十八萬五千人、非戦鬪員四十七萬二千人、合計百四十五萬七千人、この中戦鬪員五十五萬二千人、非戦鬪員三十九萬一千人合計九十四萬三千人をイギリスのために派遣した。それが今次大戦においては四一年三月までに僅かに十七萬四千人（アメリー印度事務相の議會報告）しか動員できなかつた。これはインド軍隊の軍事目的が大戦直前に變更されたことにもよるけれども、その多くの原因はインド國内の反英的參戦反對運動であると云へる。前大戦の時は、國民會議派は大戦勃發と同時に在英代表團を設けて本國を訪問せしめ、全力をあげての協力を申出るとともに、ガンヂーまでが鄕里のグジュラールに於いて軍隊の徴募運動に全力を盡したことを思へば、その間の開きは非常に大きい。

元來インド軍隊は國内の治安維持と西北國境の守備を擔當する任務をもつてゐたゝめ、一部

の軍隊の海外派遣はあつても、軍全體が國外に出るといふことは不可能であつた。それが大戰直前に、本國軍との協力部隊に變更され、歩兵二十三ケ大隊、騎兵四ヶ聯隊、砲兵五ケ中隊、重砲一ケ小隊、輜重兵十五ケ中隊（內駱駝一、輜重三）工兵四ケ中隊及び一小隊、通信百七十三人、衞生三の部隊が直接インド軍司令官の指揮下に移され、本國の命令一つによつて軍司令官の指揮下に國外遠征しなければならないため、これに備へて相當數の兵を國內に常駐することが必要となつたためと、その上日を逐つて激化するインド民衆の參戰運動への備へのためにインド軍隊の海外派遣の數は極度に制限されざるを得ないのであることは說明するまでもないのである。

民族運動の變化

インドの民族獨立運動の本質的把握は、インド史中に生起する民族運動の流れを社會、經濟的に究明しなければならないのであるが、こゝでは今次大戰を主として前大戰との差異を、經濟的、政治的背景よりみてゆくことに止めよう。

今次大戰は前大戰に比して、經濟的にも、政治的にも著しい差異がみられる。即ち、イギリスの地位が前大戰とは異り政治、經濟的にも非常に危險にさらされてゐるため、インドに新たなる役割が課せられると共に、インドの政治、經濟的の發展をみるに至つた。

前大戰に於いてインドの工業は世界の八大工業國の一つに數へられるまでに發展したが、今次大戰に於ては一昨年五月既にその軍需工業數は、前大戰最終年までに建設された數を遙かに凌駕した。これは、イギリスよりの輸入停止、イギリス並にイギリス殖民地への物資供給のためであることは前大戰と同樣であるが、更らに今次大戰の特徵とするところは、ドイツの生產力に比して、イギリスの生產力が著しく低位にあること、また海上輸送路の脅威が大なるため物資の供給基地としての任務が一層增大したこと、それと前大戰に於いて同盟國であつた國々が、今次大戰にはドイツのために壞滅し、又は敵側に立つか、中立國となつてゐるといつた狀態で、ドイツにとつて非常に有利であることである。

以上のごとき狀勢を基礎としたインドの工業の現狀については、既に、「インドはイギリス

の戰爭を如何にまかなへるか」（モスコォ「世界政治と世界經濟」）と「第二次大戰とインド」（India's War-Time Industrialization）によつて述べられてゐるため、こゝでは割愛するが、とにかくインドの工業の繁榮は、同時に工業資本の動員、利潤の增大をもたらした。このためインドの經濟的地位の向上と同時にインド人資本家の經濟的地位も向上した。戰爭によつて豐かになつた彼等がイギリスへの接近をよろこぶことは當然である。だが、經濟的自主性の增大は、同時に政治的自主性を伴ふことを忘れてはならぬ。從つて、この經濟的自主性の發展が民族運動に好條件をつくるものであることは當然であらう。

インドは一九三九年九月四日の總督聲明と同十一日のイギリス國王親書によつて正式に樞軸國との交戰狀態に入つた。

國王の親書にも述べられてゐるごとく即ち

「余は共通せる危機を前にして、余及び余の國民が現在參加せる鬪爭に、インド社會各層の同情及び支援を期待し得るものと確信す」

インドのごとく殖民地にして、且民族運動の發達したところでは戰爭を圓滑に遂行せんがためには、その民衆の協力が絶對必要である。國王の親書もそれを要求したものである。前大戰は、この點について多くの經驗を殘してくれた。即ち、前大戰におけるインドの人的、物的の援助は著しいものであつたが、而も尙、遲きに失した。そのため今次大戰が不可避なることを察したイギリスは、軍需省を設置するとともに、印度統治法修正法案を議會によつて採擇し、さらに戰爭發とゝもに印度國防令を發布して國內の治安維持に備へた。

そして、またインドの諸摩擦の緩和及びインド人との妥協、又インド人の協力、援助を必要とするところから、國防國家體制の補强工作として、中央に於ては內閣の擴充とインド人大臣の增加が實現され、又インド土侯國の代表をも含めた國防顧問會議や、市民防護團、各軍管區毎に國防委員會が設置された。

次に國際的任務としては、イギリス帝國東半球經濟會議の開催であり、これによつてインドは東半球のイギリス殖民地に物資を供給する役割を與へられた。

このため政府の民間需要の增加、企業の新設、擴張、それによる勞働力の吸收、さらに業者ならびに消費者の物資の買溜は當然物價の騰貴を招來せずにはをかなかつた。一方、一般民衆

の窮乏は、一部インド人資本家の好況に逆比例してその度を深めるに至つた。

かくの如き社會不安の深刻化は徐々に反英運動にかり立てる地盤を醸成し、勞働者の罷業、農民の暴動、學生、勞働者の反英、參戰反對運動となつて表はれるに至つた。この詳細は「インドは如何に戰ふか」（モスコウ「世界政治と世界經濟」）と「インド邊境地區は立つ」「反英運動の指導者としてのネールとガンヂー」によつて述べてあるため、こゝでは重複を避けたい。

これら無智と言はれ暗遇と稱せられてゐたインド民衆こそ、インド獨立運動の原動力をなすものであるが、インド上層部ではまた異つた見解を持つて、イギリスとの妥協を策した。彼等は、イギリス敗戰後のインドの混亂、或ひは他民族の侵入を過大評價して、イギリスとの協力こそインドを盛り立て、且つインドを救ふものであると云ふのである。さらにインドを複雜にしてゐるもう一つの原因として宗教上の對立、各政黨政派の對立、抗爭があつた。

大戰下の反英運動の不統一

その各黨派の動きをみると回教徒は反英的色彩は薄弱である。それは大戰を好機として國民會議派の活動を怖れるため、國民會議派とゝもに反英統一戰線を布くことには躊躇してゐる。回教徒聯盟に席を存しながらそれとは獨立した勢力を有するパンヂャブ首相ジャンダル・ハヤット・ハーン及びベンガル首相フアヅルール・ハクはイギリスへの援助を約し、又回教徒シアー派の重鎭アガ・ハーンは「イギリスの戰爭に對して無制限の援助を」宣言し、しかるにその他の回教徒小黨派のあるものは國民會議派と協力し、或は回教徒聯盟反對、回教徒の利益尊重を叫び、又あるものはイギリスとの協力を申出る等まちまちである。

自由聯盟は、常に親英的であり戰爭に對しても無條件援助を主張し、インド教徒の團體であるヒンヅー・マハサバは、積極的イギリス援助でもなく、それかとて、反英的態度でもない日和見的存在をつゞけてゐる。イギリスより長い恩顧をうけた土侯は、イギリス援助は當然であらう。それは民衆の反土侯的運動を抑へるためにも最良の途であるからである。又、大戰によつて活況を豫定される實業家連は、イギリス援助に傾きつゝあるは勿論であるが、インドの自主性獲得のために利益を得られる就中綿工場の實業家連はガンヂーや國民會議派を支持してゐ

るといつた無統一ぶりである。

最後にインドに於ける最も大きい政黨である國民會議派はどうか、一九三八年ハリプラ大會に於いて「インドは國民の明瞭な承認なくしては如何なる戰爭にも參加し得ない……若しインドを戰爭に引入れる試みがなされるならば反抗の氣運が示されるであらう」と聲明し、さらに翌年のトリプリ大會にも反戰、平和の態度を明らかにした。大戰勃發とともに、イギリスはインドの參加をも聲明したが、それに對して實行委員會は、戰爭態度の獨自的決定權の要求、反ファッショ態度の闡明、帝國主義の放棄とデモクラシー並にインド民衆への自由の許與を掲げて反英運動を續行した。

しかるに、ガンヂーは今次戰爭の目的に贊意を表して、暗に協力を仄かしたのであるが、國民會議派はガンヂーを無視して反戰態度を堅持しつゝ、イギリス援助の代償としての獨立許可、及びその過渡的方法として中央政府の改組を要求した。しかしイギリスは回教徒聯盟、自由聯盟、ヒンヅー、マハサバ等と交渉してその協力を得ることになつたので所謂（白書）を發表して、大戰終了後インドに對して自治領的地位を認める意向のあることを表明して、國民會議派の要求を一蹴した。これに對して國民會議派は州政府の辭職をもつて答へた。これらの具體的な動きは「インドは如何に戰ふか」によつて既述したとほりである。かかくのごとく一見はなやかにみえる反英運動も本質的には大戰勃發より現在に至るまで民族運動の新しい發展はなかつたのである。それは從來通り、國內の分裂、對立が續けられ、いたずらにイギリスにつけ入られる機會をつくると同時に民族運動の前途に暗影を投げかけずにはおかないであらう。

反英運動と農村の階級分析

今次大戰はインドの經濟、特に農業に甚大な影響をあたへた。歐洲市場、日本市場の閉塞により農產物の輸出は極端な後退をみせ、開戰後半年にして早くも、深刻な恐怖を經驗した。その上、イギリスの戰費調達はインド農民の搾取をより强化せざるを得なかつた。しかも、イギリスの對樞軸戰の敗戰につぐ敗戰はインドの搾取をより强化せずにはおかないであらうし、その際一番强く打擊をうけるものは、封建的過小經營の枠內に押しこめられてゐる農民である。

われ〳〵は、今こゝにイギリス帝國主義の大戰による言語に絶する搾取の對照であるインドの基本問題である農業問題を理解する必要があらう。

Montagu-Chelmsford Report 1918 の記述によれば工業國たるイギリスでは人口一〇〇に對し、工業人口は五人、農業人口は八であるのに對し、インドでは農業人口は全人口の七一%に當つてゐる。この農業人口の過剰は、イギリスの近代工業の製品の侵入に伴ふ土着手工業の沒落と、他方インド工業の發展抑壓政策によつて過剰人口を吸收する近代工業を許容しなかつたゝめに原因したものである。事實工業人口の率は一九一一年の五・五%以降低下し、一九三一年には四・三%、人口增加三八百萬に比し却つて二百萬の減少になり、それだけ農業への過重を大ならしめることになつてゐる。

他方、原料作物に對する食用作物は相對的に減少し、一九一〇——一五年の平均と一九三四——五年とをみれば食用作物の作付面積の一二・四%增加に對し、原料作物面積は五四%となり、原棉も油種子の輸出を一九〇〇——一年、一九三四——五年の比によれば前者は一七・八萬トンから六一・一五萬トンに、後者は五四・九萬トンから八七・五萬トンと增加してゐる。

かゝる農村への人口過重はインドの貧困の根本原因であつて、そのため、農民をして土地を如何なる條件の下においても求めんとして互ひに競爭せしむるに至り、その結果一人當りの耕作面積の減少を來し、食用作物作付面積は益々多數を養はねばならなくなるところとなる。

第一次大戰の時は、黃麻業、綿業、鐵鋼業に目覺しい發展がみられ、工業面において一時的な好況があつたが、農業は反對に大戰によつて激しい打擊を蒙つた。しかもその上に一九一八——一九年の大飢饉と惡疫は農民の窮乏に拍車をかけ、農民の負債は四四%がた增加したと言はれてゐる。この間に、地主——高利貸の土地兼併、中農層の減少による小作農、農業勞働者の激增により、農林の分解は急激に進行した。

インドでは全有職人口の六五・六%が農業人口であり、この農業人口をさらに階級別に分類すれば、地主の四%に對し、自作二七・四五%、小作三五・〇三%を占め、農業勞者は三二・四一%であつて、四%にすぎぬ地主が九六%に及ぶ自作、小作、農業勞働者を直接、間接に支配してゐるといふ、この事實こそ、インド農業經濟のかぎりなき悲哀と苦惱の根柢が横はつてゐるものである。

コドラス州に於ける農村階級分析

	地主	中間地主	自作	小作	農業勞働者	合計
一九〇一	一・九	〇・一	四八・四	一五・一	三四・五	一〇〇
一九二一	四・九	二・八	三八・一	二二・五	三一・七	一〇〇

註――一九二一年の農業勞働者の減少は一九一九――二〇年の大飢饉と惡疫の流行による

小作階級は、一八一八年の平均一七・五エーカーの所有は、一九一五年には七エーカーとなり、個々の所有は一〇エーカー以下が八一％、その中六〇％までが五エーカー以下である。では、インドの小作の生計可能な耕作面積はいかほどかといふに、ボンベイの乾地帶では一〇――一五エーカーが水準であるが、ある工場に近い一村の一〇三家族の調査によれば、水準に達するもの八。一部を工場勞働によつて補ふもの二八、尙不及者六七を數へてゐる。さらに純農村に目を轉ずれば、一四七家族中、水準のもの一〇、勞賃による補塡一二、生活困難のもの一二五をあげ、しかも驚くべきことは生活不足一二五の人口は七三二人にして全人口の九一％であることである。

さらに農業勞働者に至つては尙悲慘である。一八八二年の國勢調査によれば七五百萬、一九二一年二一百萬、一九三一年三三百萬であつたが、今日では更らに增加してゐるとみなければならない。これらの賃金は一八四二年から一九二二年の間に四倍――六倍（食事なしに一日四――六アンナ）となつてゐるが、一方米價はこの間八倍となつてゐる。これが、一九三四年には一日平均收入三アンナに慘落した。しかもインドの特徵は、これらの多くが文字通り數代に亘つて債務の奴隷となつてゐることである。

試みに、インドに於ける農家收入をみるに、一ケ年の平均收入は四二ルピを超えることなく、トリチノポー縣ネルール村の總人口六二〇〇人の狀態は、全產額三四四千ルピーの內、耕作經營費中村民外に支拂ふ部分を除き、又村外に得たる勞賃及び政府支拂の俸給を合して純收入二三六千ルピー（一人當三九ルピー）之に對する支出は地租並びに水利稅三〇千ルピー、他村地主への小作料七〇千ルピー、他村高利貸への利子（年八分）四〇千ルピー、其他及諸課稅合計一六千ルピー、計一五六千ルピー。村に殘すもの人口千ルピー一人當り一三ルピーとな

る。

これは地主的土地所有が大經營を伴はず、地主は寄生的地主として止つてゐる上に、高利貸的性格を有し、負債を通じて小農の窮乏を促進してゐることである。インド農民の負債總額は、一九三一年に九十億ルピー、一九三八年一六〇億ルピー。これを一農家當りにみると（ベンガル州のビルブハム地方）負債總額二三〇ルピーのうち、その二四・二%は地代支拂が主なる原因であり、舊債支拂をも加へれば三二・六%であり、これに反して農耕施設改善及び農耕經營を理由とする生産的負債は各二三・七%、七・八%にすぎないのである。その原因は、言語に絶した苛酷なる地租制度のためであつて、その制度は收穫の如何に拘らず、定額地租（註）の支拂を要求出來得るといふ高額負擔と、地代、鹽稅、結婚稅等のごとき封建的課稅とが結びついてゐるところにある。これが農民を零落の淵に墮し込む直接原因であらう。

註——定額地租では、地主取得分は農家純收入の六〇%——二〇〇%が地主取得分で、小作人の收入は經營費を割り、その差額を負債によつて充當せざるを得ない。このため農家家計支出の三〇%を負債利拂に充てなければならないといふ破滅的經營である。

かゝる土地制度、零細經營にあるインドの農業技術が極めて原始的な段階に停滯し如何なる國よりも劣らざるを得ないことは當然なことである。

一ヘクタール當り產額

	米	小麥	大麥	棉花
インド	一三・九	六・三	八・九	一・〇
日本	三八・六	一九・一	二〇・九	—
米國	二四・七	九・一	一一・九	三・〇
ソ聯	—	一〇・七	九・三	三・九
ドイツ	—	二二・六	二一・二	—
カナダ	—	四・七	一〇・三	—
支那	二六・五	一〇・〇	一〇・七	一・六
濠洲	—	九・三	一一・二	—
デンマーク	—	二八・五	二九・八	—

エジプト	――	二一・五	二一・〇	六・〇
世界平均	一五・八	一〇・〇	一一・三	一・二

註――一九三七年度調査による。單位キンタール

以上のごとく一ヘクタール當り收穫をみるに、いづれも世界平均を下廻つてをり、換金作物の隨一たる棉花のごときは一九〇一年來約四十年間八〇ポンド内外に停止し、たゞ低下の一途をたどつてゐる狀態にある。これが一九世紀前半には一五〇ポンドにも上つてゐたことを思へば、インド農業の衰退がイギリス統治下に於て如何に急激的な可速度をもつて低落したかに驚く以外はない。

以上の記述から、インド農業の危機的現樣相を見出せば、即ち、一、イギリスの殖民地政策就中工業發展の阻止政策による國民經濟における農業への過重。二、農業の停頓と荒廢による收穫の減少及び土地の荒廢化。三、土地飢饉の增大による、所有の零細化、耕地の非經濟單位の增大。四、地主勢力の强加と不在地主への轉化による土地の農業者以外への移行。五、自作農の負擔の增加のために土地放棄の增加。六、農業勞働者への轉落による同階級の增大となることは當然であり、イギリスの地主制の擁護によつて、地主をイギリスの味方に引つけ、インド民衆との分離を策した、最も巧妙なイギリスのインド統治の典型的政策と云へる。かゝる政策の犧牲とさらに一九三〇――三七年の恐怖によつてインド人三億五千萬が無力と飢饉に追ひつめられ、しかも、その恢復のしよ光すらみることなく、慢性的恐慌のうちに、今次大戦の渦中に捲き込まれた悲しむべき現實を我々は見逃してはならないであらう。

大戦による農民の窮乏と反英運動

開戦によつて、黄麻、棉花、油種子のごとき、重要軍需原料をもつインド農業は好景氣といふ輝しい贈り物を得られると考へてゐた。だが、開戦四ケ月にしてその夢もはかなく消えうせ、現在では農産物の全般、勿論、黄麻製品、棉製品にも及ぶ反動的値下りのために、第二次大戦は、開戦後半年にして早くも深刻な農業恐怖をもたらした。

かゝる戰時農業恐怖は、さなきだに窮乏せる農民の窮迫に拍車をかけ、悲慘はさらに悲慘を生み、農產品値下り、反對に生活必需品の値上りによる農家收入の絕對的、相對的減少にも拘らず、彼らは多額の戰時費の重壓をやせ細つた兩肩に荷ふべく餘儀なくされたことである。今次大戰によつて、イギリスは戰費調達のためインド人より毎日二百萬ルピーを取上げてゐるが、農民の負擔の强化は、彼等の唯一の農具たる犁にまで課稅し、四〇年三月よりは砂糖消費稅を五割方增加した。開戰當初の景氣來も、僅か、地主や商人の一部を潤ほしたにすぎず、その恩惠が下層農民にまで行きわたらないうちに、又々、反動的恐慌に襲はれ、農民はそれを裸のまゝで受けねばならないといふ悲慘事を味はねばならなかつた。しかも戰費調達に血眼のイギリスは、戰爭を口實に何ら農村對策を構ずる意志はなく、逆に、地主——高利貸勢力を味方として搾取を强化する一方である。

このために反英的農民運動も激化し、それは暴力行爲や蜂起にまで發展してゐる。一九三六年に結成された全インド農民同盟も、一九三八年に五五萬人、三九年に八〇萬人が、今や一〇〇萬人を突破して、地代引上げの反對、土地取上げの反對、强制勞働の反對策の要求を行つてゐる。そして、四〇年三月バラサで開催されたキサン・サバの大會では「國民的要求を體現して、現在の會議派領袖の軟弱政策を批判する」といふ決議をした。だが、インド農民三億に對して、僅か一〇〇萬にすぎぬキサン・サバの勢力を過大評價することは間違ひであつて、彼等農民の上には依然として强大な地主勢力がのしかゝつてゐることを認めなければならない。

インド民族運動の目標は、イギリスの民族支配、戰時におけるその强化に對してむけられてゐることは當然であるが、それは廣汎な農村が地盤であり、されば國民會議派は、農民による結社の自由、中間地主の排除、農家負債の正當なる整理、封建的、半封建的課稅より農民の解放、小作料及び地稅の實質的輕減策を要求して、インド民衆の窮乏の根本的救濟は土地制度の改革にあることを指摘してゐる。

しかし、何時果つるともしれない今次大戰に、イギリスはインド農村の救濟に考慮することなく、地主、高利貸を牙城として、農村への攻擊をます〳〵强化するであらうし、かくて農村はさらに停滯し、いよいよ疲弊し、飢餓に追ひ込められたこれらインド農民の反英運動は、イギリスをして戰爭遂行のための大きな障害となるであらう。

大東亞戰爭とインド工業

大戰下のインド工業の及び資源については、既述のヴェー・ブーシェヴイツチ、アー・ジジヤーコフ及びアンドルー・ロスの文によつて解かれてゐるが、われ〳〵はさらに大東亞戰爭にインドの資源及び工業にふれる必要があると思ふ。

インドの近代的諸工業は、兵器製造、製鋼、化學工業の部門において第二次大戰勃發以來顯著な發展をとげた。（表一）

主要工業生産指數（一九三五——一〇〇）

年月	棉花消費高	黃麻製品	鋼塊	銑鐵
一九三二—三三	九二・四	九〇・三	六八・二	六〇・三
三三—三四	八九・〇	九〇・六	八三・四	七六・二
三四—三五	九九・四	九五・〇	九六・七	九二・五
三五—三六	一〇一・五	一〇一・一	一〇二・〇	一〇六・二
三六—三七	一〇一・四	一二五・〇	九九・八	一〇七・〇
三七—三八	一一一・六	一三〇・五	一〇六・九	一一三・四
三八—三九	一二〇・四	一二一・八	一一三・四	一〇八・六
三九—四〇	一一四・三	一二八・〇	一二四・三	一二七・一
一九四一—一	一三九・七	八五・一	一二九・六	一四〇・三
二	一三七・四	一〇七・八	一六六・七	一四九・八
三	一四一・六	八八・一	一四八・五	一四二・三
四	一三八・八	一一九・九	一六一・一	一四一・九
五	一三九・七	一〇八・九	一五一・三	一四六・七
六	一四〇・二	一〇七・〇	一五六・九	一四〇・二

(Copita, August 21, 1941 による)

鐵鋼業は既述のごとく、第一次大戰以來、軍事的要求のために發表したインド唯一の重工業であるが、その中心はいふまでもなくインド銑鐵の約七割、鋼鐵の殆んど全部を占めるタータ一鐵鋼會社である。

「この一年間（一九四〇——四一年）の事業は、現在の事業擴張計畫の一部をなすものである。新鋼鐵製造工場の建設を以つて開始された。同工場はジャムシエドプールで發達した全く新規の方法によつて鋼鐵の生產を行ひうるばかりでなく、純インド產の諸原料をもつて酸性鋼をはじめて製造するまでに進步したが、戰爭によつて遲延したにもかゝはらず一九四一年末までには同工場は操業を開始しうる見込みである。また二つの電氣爐がネガパタル鋼鐵壓延工場から購入され、從來平爐工場として有名な第一鑄鋼工場に据付けられた。これら電氣爐は政府に供給する特殊鋼の製作に極めて有效なものとなつた。別に鑄型及び鐵床を製造するための鑄造が建設され、一九四一年一月から仕事をはじめた」(Ctopital 1941)

とあるごとくいまやインドにおいては多種多樣の特殊鋼が生產されることゝなつた。（「インドはイギリスの戰爭をまかなひ得るか」と「大戰下におけるインドの工業」參照

また化學工業においてもアルミニユームの製造や、鹽素、苛性ソーダ、ソーダ灰等の重化學工業が戰爭によつて生產されることゝなつた。

しかし、これは決してインド自身の力によつて發表したものではないことは當然であつて、かゝるインド工業の發達は、外國主としてイギリス、ドイツから機械輸入にその基礎があつた。それが第二次大戰とともにドイツは敵國の側にあるため、その通商は斷絕し、イギリスもまた自國の軍需資材の製作に忙殺されて輸出餘力はなくなるに及び、インドは機械輸入手の困難に逢着せざるを得なくなつた。この時、アメリカからその途を求めるやうにしたゝめ、インドの機械輸入額は一九三八——三九年の一九〇百萬ルピーから、一九四〇——四一年一一八百萬ルピーに減少したが、それでもようやくインド工業の擴大には間に合ふことが出來たのであつた。しかるに大東亞戰爭の勃發により、それが壓倒的日本軍の勝利によつて、この唯一の機械輸入國であつたアメリカよりの通商は遮斷され、こゝに全くインドは機械入手の途を失つたのである。このことは今次大戰以來急激な發展を策しつゝあつたインド工業化を制限するばかりでなくインド工業化の停頓の重大な原因であり、ひいてはインドの抗戰力を減殺するものと

なつた。

しかしながら、インドの工業化はこれによつて挫折するとは考へられない。たゞ、その途は、インド工業生産をその自主的基礎の上にうちたてることが考へられ努力される以外にはないであらう。

インドの大戰に對する軍備

インドの軍備については、極めて誇張したイギリス側宣傳によつて知る以外にほとんど方法はないが、しかし、一應イギリス側の發表を基礎として、中心的な點だけについてみると、兵員の擴張については陸軍の大增員、空軍四倍、海軍二倍半と云はれてゐて、戰前兵力二十六萬（豫備を含む）の中海外渡遣部隊を除き、第一期三十二萬、第二期五十萬、第三期百萬の目標で、現在その第二期を完了し、第三期計畫に向つて進行中であると發表してゐる。又、軍の機械化については、騎兵および砲兵の射手十六倍增加、戰前の戰車をふくむ裝甲車輛五千五百臺

の大擴張計畫が、四一年三月にははやくも三萬二千臺に達したと報告してゐる。しかしインドは、また基本的な技術訓練の時代にあるので、現在ではむしろ軍自身の機械化より機械化のために必要な兵員の養成が重要であつて、そのため各種學校の擴張に着手された。即ち全印八ケ所の飛行機訓練所の設置、裝甲戰車學校、機械化輸送部隊の五倍擴張、化學武器學校の三倍擴張、一般將校の大量養成がそれである。

又軍需品の確保については四千萬ルピーを七千萬ルピーに增加し、兵器工場の擴充にあて、その結果インドの八つの兵器廠の使用勞働者數を一萬七千人から、四萬九千人に增加し、イヒヤボボの銃器及び金屬鋼鐵兩兵器廠、シヤージヤハンプールの被服廠を中心に千四百種の被服兵器の製造をはじめ、さらに今までの小型兵器に加へて對戰車砲、航空器用兵器、三・五吋高射砲の部分品、二・五ポンド榴彈砲等、又鐵道工場から四—五吋曲射砲と小銃彈を、民間の黃麻工場もこれに協力し、現在九十六臺の旋盤を政府に貸付けたことを發表してゐる。

クリップスの敗退

四月十一日、英・印交渉は遂に決裂し、クリップスは完全に敗退した。このことはインド指導者層とインテリ層に妥協的空氣が濃厚であつたゞけに、このイギリス提案を拒否したものを探求することが大切である。

先づクリップスの提案の要點は、

一、草案の目的は「自治領を構成すべき新インド聯邦の創立」にあり、この場合インドは「自治領とあらゆる點において平等の立場におかれる。」

二、「戰爭後直ちに……新案法制定委員會を選出する。」

三、憲法制定委員は、戰爭終結と同時に行はれる各州選擧の結果を基準に比例代表制によつて選出される。土侯國も人口に比例する代表者を指名する。

四、イギリスは次の條件で新憲法を承認する。

（イ）新憲法を欲しない州は別個の新憲法を制定し得ること。

（ロ）少數民族、少數宗派の保護に關する規程をふくむ條約をイギリス政府と憲法制定委員會との間に結ぶこと。

五、「現在インドの直面せる危機の持續のかぎり、且つ新憲法が制定されるまではイギリス政府は全世界にわたる戰爭遂行の一部門として、インドに對する統制、指導、防衛の責任をみづから擔當し、かつインド國民の軍事的物質的資源を最高度まで組織するといふ努力を繼續せざるを得ない」

この提案については多くの批判が加へられ、結局、イギリス一流の僞瞞政策であるとされた。しかしながらこの提案に對する拒否の理由は各派によつてまちまちであり、またその內容も報道によつて異つてゐるが、大體、回教徒聯盟は、インド聯邦分立についての方法が消極的であるといひ、ヒンツー・マハサバ、國民黨は新憲法拒否の自由が各州に與へられることにあつたとなし、國民會議派は、クリップス草案に對する贊否といふよりも、インド政治機構即時改革の要求がイギリス政府によつて一蹴されたといふのである。

しかし、先に、英印妥協の可能性が濃厚であつたことを知つてゐるわれ〳〵は、以上の理由だけでイギリス提案を拒否したことについてはなほ疑問をさしはさまざるを得ないのであつて、英印交渉の決裂はむしろインドの指導者達を牽制した強い別個の力が存在してゐたものであると考へる。それは既述の「インドはいかに戰ふか」その他によつて理解できるやうにインド民衆の力ではなかつたかと思ふ。

無智と暗愚によつて代表されたインド民衆こそ、インド獨立運動の眞の力であり、反英運動の中心力である。それはインド民族運動史のすべての時と處に名を留めてゐる。それ故に、インド指導者層を眞に牽制し得るものは彼等のみであると斷言出來る

英印會談は遂に決裂した。イギリス必死の局面打開策であつた英印交渉と、逆にイギリス帝國の崩壞といふ歴史的必然をこゝに自ら暴露したものであり、インド民衆はこの日より新しいスタートを切ることゝなつた。この時にあたり、わが、東條首相は次のやうに聲明した「インドにおけるイギリスの兵力及び軍事施設にたいし一大痛擊を加へることゝなつた……もとより帝國の意圖するところはインド四億の足衆を敵とするものではない……余は今日こそインド民衆が「インド人のインド」を建設してインド本然の姿の確立のために全力を致すべき絶好の機會であることを確信するものである」と、インド民衆への同情を述べた。さればインド民衆もその眞實のこゝろを理解して、自らの新しき歴史を創り出すことに努力しなければならないであらう。

昭和17年9月15日印刷
昭和17年9月20日發行

東亞經濟文化叢書第三輯
大東亞戰爭下の印度
新 一・〇〇

編譯者 金平太郎
發行者 花田鐵太郎 東京市芝區南佐久間町一ノ一
印刷者 近藤喜七 東京市芝區西久保巴町三〇

發行所 東邦書院 東京市芝區南佐久間町一ノ一 振替東京一五七三・電芝〇三九一番
配給元 日本出版配給株式會社 東京市神田區淡路町二ノ九

（會員番號一二〇〇七二）

彈丸下の經濟建設

三菱重工社長　郷古潔著

定價　一圓五〇　送料　一二

日本重工業の最高指導者たる郷古潔氏が大東亞共榮經濟建設の原理によつて産業戰士に經濟人に施政者に向つて諄々と述べたる直言の書である。

（東亞經濟文化叢書）

(1) アメリカの太平洋作戰　定價一圓　送料八

(2) 日本はどう攻めてくる　定價六十錢　送料四

アメリカ戰術家の發表した太平洋作戰と日本のアメリカ本土攻略構想。

(3) 大東亞戰下の印度　定價一圓　送料一〇

大東亞戰による印度蜂起直前の正確なる全貌

八幡船の史的考察

松下三鷹著　定價一圓二〇　送料八

その研究八幡船隊の戰略にまで及べる本書は海軍中堅によつて熱讀されてゐる。

少年航空戰

堤邦雄著　定價一圓二〇　送料一二

少年のための雄大無比爽快極まりない新冒險小說である。

東京市芝區南佐久間町一の一　東邦書院　振替東京一五七三番　電話芝(43)〇三九一番

945
224

(国民党中央宣传委员会)